

コロナ禍の 多胎家庭 実態調査報告書

今求められる多胎家庭支援策を提言



特定非営利活動法人
ぎふ多胎ネット

はじめに

ぎふ多胎ネットでは、2020年4月、第1回緊急事態宣言が出された時に1回目の「コロナ禍の多胎家庭実態調査」をしました。突然の全国一斉休校・休園、外出自粛という誰もが未曾有の体験の中、人と人とのつながりは絶たれ、この先どうなっていくのか、日本中が戸惑っていました。この状況で、多胎家庭はいったいどうしているだろうと心配になったからです。

その結果は当団体のホームページに掲載してありますが、育児不安や育児負担が増える中、それでも前向きに乗り越えようとする姿やステイホームを楽しもうとする姿に心打たれたものでした。

しかし、あの時はまだ、先が見えないけれど、まさかこんなに長引くとは思っていなかった時期だったと思います。2022年現在、コロナ禍も2年目となり、先の時にはなかった病棟の逼迫なども起こりました。With コロナの時代とも言われ、コロナ疲れも見え始めています。みんな、その後どうしているだろう。コロナ禍で多胎妊娠・出産した人はどんなだろう。ますます心配になりました。また、ぎふ多胎ネットのサポーターたちが訪問先で感じたコロナ禍での新たな課題を口にするようになりました。

これは、もう一度きちんとした調査をしなければという危機感を私たちは抱きました。どこかに隠れた課題があり苦しんでいる人がいるかもしれない、見落としがあるかもしれないと思ったからです。

調査には岐阜県立看護大学の服部律子先生・名和文香先生にご協力いただきました。先生方には学術的な観点から調査の結果と考察をご執筆いただきました。そのおかげで、本調査研究を価値あるものにしていただきました。紙面を借りて心から御礼申し上げます。

また、何よりも本当に忙しい毎日の中、たくさんの項目のアンケートにご回答いただきました多胎家庭の皆さまには心から感謝申し上げます。

この調査研究は、「今の多胎家庭の生の声」です。

たくさんの方に知っていただき、真摯に受け止めていただくことで、地域での温かい支援につながっていくことを願ってやみません。

私どもも、ますます多胎支援に真摯に取り組んでいきたいと思っております。今後ともご支援ご協力をお願い致します。

誰もが「ふたご・みつごを産んで本当に良かった」と笑顔で言える社会を目指して。

2022年春

NPO 法人ぎふ多胎ネット 理事長 糸井川誠子

目次

| | |
|--------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 調査の概要 | 3 |
| 回答者の基本情報 | 4 |
| 母親への調査の結果 | 9 |
| 母親への調査結果についての分析と考察 | 36 |
| 父親への調査結果と考察 | 41 |
| 政策提言 | 47 |
| おわりに | 55 |

調査の概要

I. 目的

近年多胎家庭の育児支援について関心が高まっている。ぎふ多胎ネットでは、以前より多胎家庭に調査を行い、支援ニーズの把握に努めてきたが、今回コロナ禍において多胎家庭がどのような支援ニーズをもっているかを明確にし、また昨年度より法制化された「産後ケア事業」についてもその実情を明らかにするため、アンケート調査を実施した。

II. 調査方法

質問項目は、多胎家庭の背景（子どもの年齢、出生体重、母親の年齢、家族形態、就労形態など）、多胎育児の困難感、母親の体調、育児の援助者、コロナ禍における多胎育児について、産後ケアの利用状況、産後ケアの料金への希望などであった。質問項目の一部は、厚生労働省が都道府県及び政令市に委託して行っている「幼児健康調査」を参考にした。

対象はぎふ多胎ネットに登録されている多胎家庭のうち多胎児が3歳以下の家庭であり、登録者（母親）にメールでアンケートを送付した。また父親についてもアンケート項目を作成し、父親にも別のURLでアンケートに回答してもらうこととした。アンケートはgoogleのformsで作成した。

III. 倫理的配慮

アンケート配信は、ぎふ多胎ネットの名簿管理者が行い、無記名の調査であることを明記した。予め、調査に関して対象者には説明文をメールにて送付し、調査の目的や方法を理解してもらった。アンケートは無記名で返信も個人が特定されないように設定した。本研究は岐阜県立看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けた。（承認番号 0280）



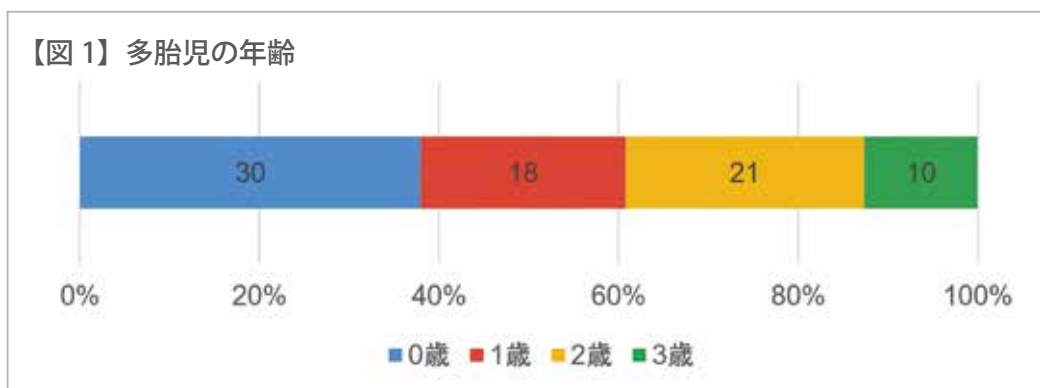
回答者の基本情報

ぎふ多胎ネットに登録している多胎児が3歳以下の家庭(登録者)は280人でありすべて母親であった。対象者全員にメールでアンケート調査を依頼した。回答は、母親79名、父親14名であった。

以下の家族背景については、母親から答えてもらった。

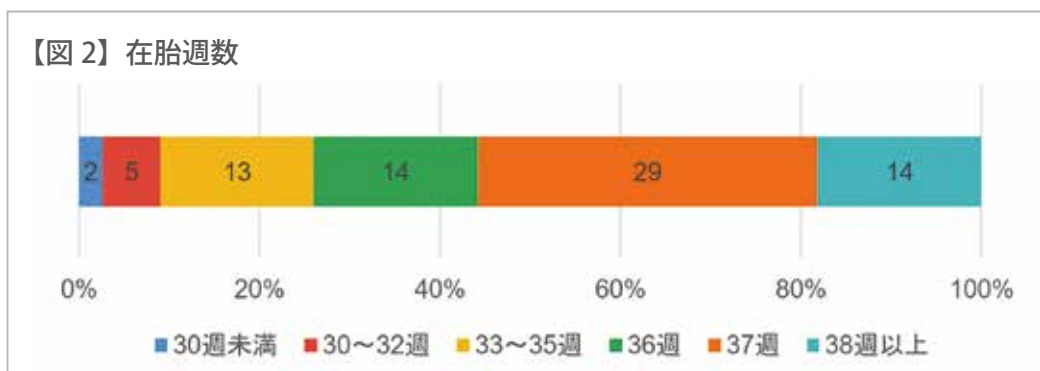
1. 多胎児の年齢、在胎週数、出生体重、家族構成などの背景

多胎児の年齢は0歳30件(38%)、1歳18件(22.8%)、2歳21件(26.6%)、3歳10件(12.7%)であった。【図1】

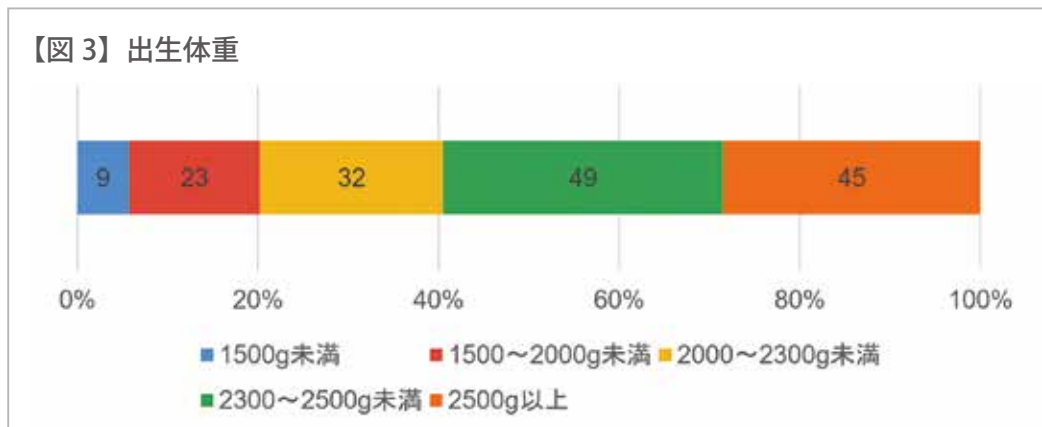


性別は第1子男児35名、女児44名、第2子男児35名、女児44名であった。

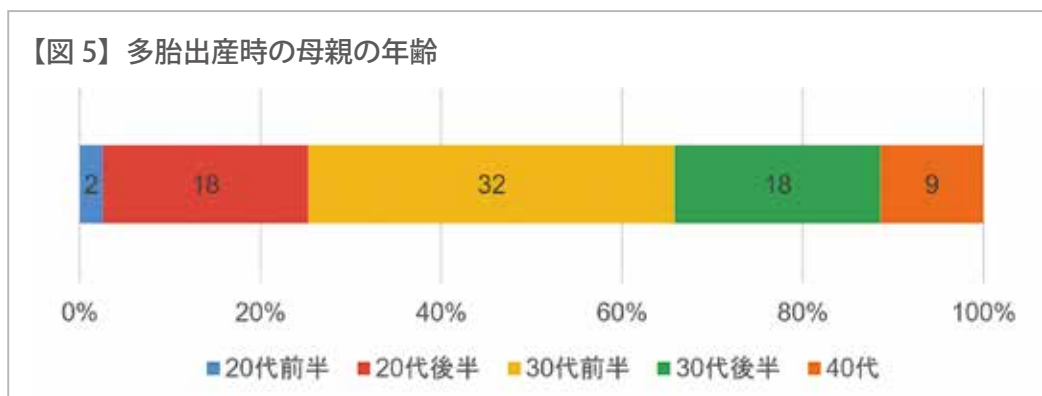
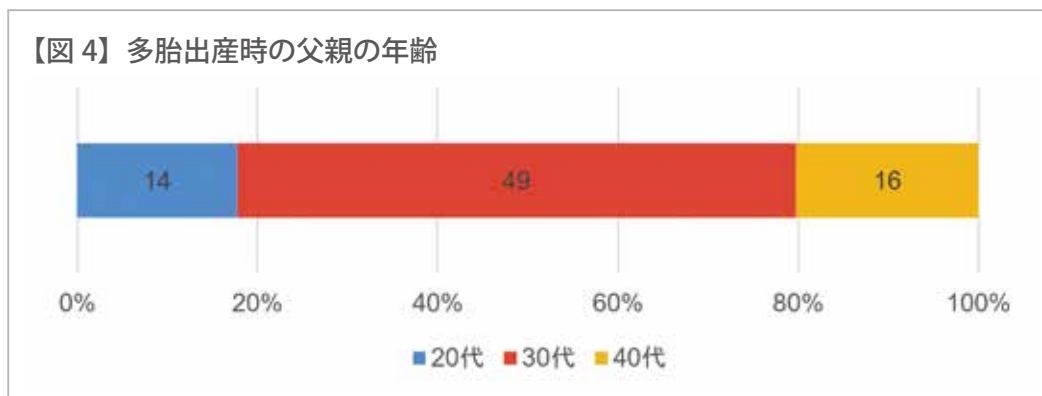
在胎週数は、30週未満2件(2.5%)、30～32週5件(6.5%)、33～35週13件(16.9%)、36週14件(18.2%)、37週29件(37.7%)、38週以上14件(18.2%)であった。【図2】



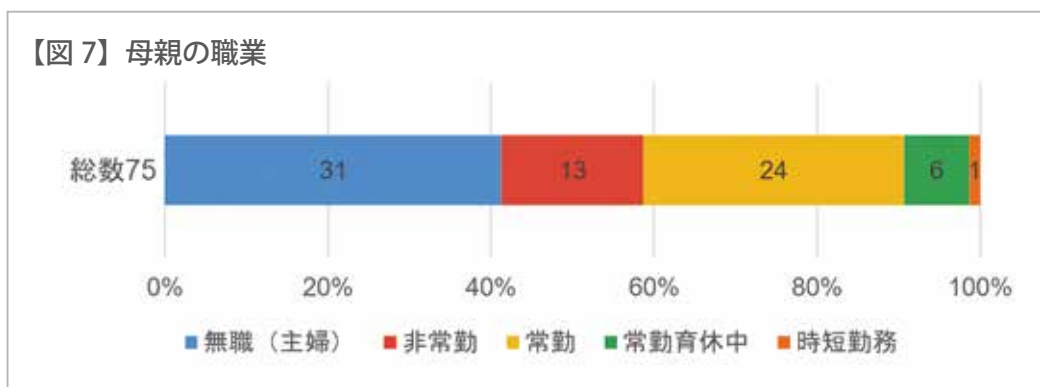
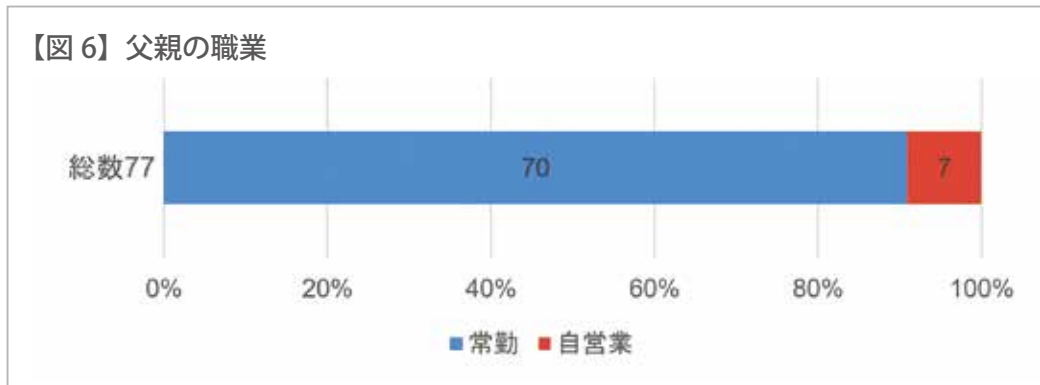
出生体重は、1500g 未満が 9 名 (5.6%)、1500～2000g 未満が 23 名 (14.6%)、2000～2300g 未満が 32 名 (20.3%)、2300～2500g 未満が 49 名 (31%)、2500g 以上 45 名 (28.5%) であった。【図 3】



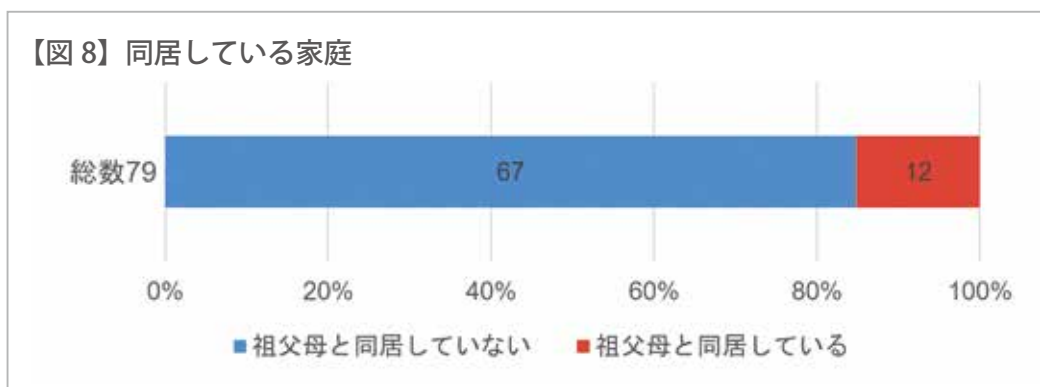
多胎出産時の父親の年齢は、20代が 14 名 (17.7%)、30代 49 名 (62%)、40代 16 名 (20.3%) であり【図 4】、母親の年齢は、20代前半 2 名 (2.5%)、20代後半 18 名 (22.8%)、30代前半 32 名 (40.5%)、30代後半 18 名 (22.8%)、40代 9 名 (11.4%) であった。【図 5】



父親の職業は、常勤 70 名 (88.6%)、自営業 7 名 (8.9%) 【図 6】、母親の職業は、無職 (主婦) 31 名 (41.3%)、非常勤 13 名 (16.9%) 常勤 24 名 (32%) 常勤育休中 6 名 (7.8%) 時短勤務 1 名 (1.3%) であった。【図 7】

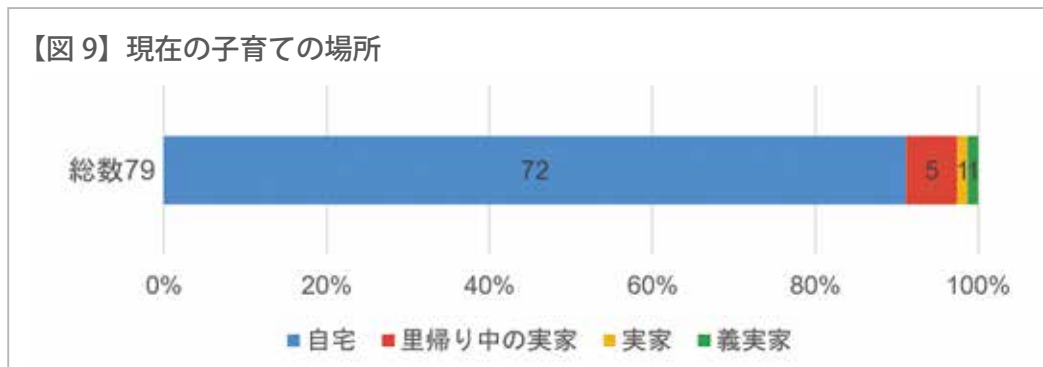


同居している家庭について、祖父母と同居していない家庭が 67 件 (84.8%)、同居している家庭は 12 件 (15.2%) であった。【図 8】 離婚している家庭は 2 件であった。

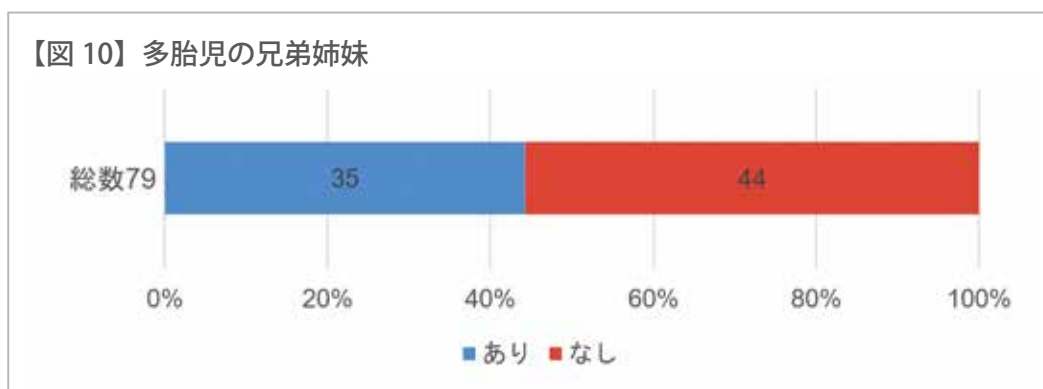


同居の内訳は父方の祖父 3 件、祖母 4 件、母方の祖父 2 件、母方の祖母 8 件、その他 3 件であった (複数回答含む)。

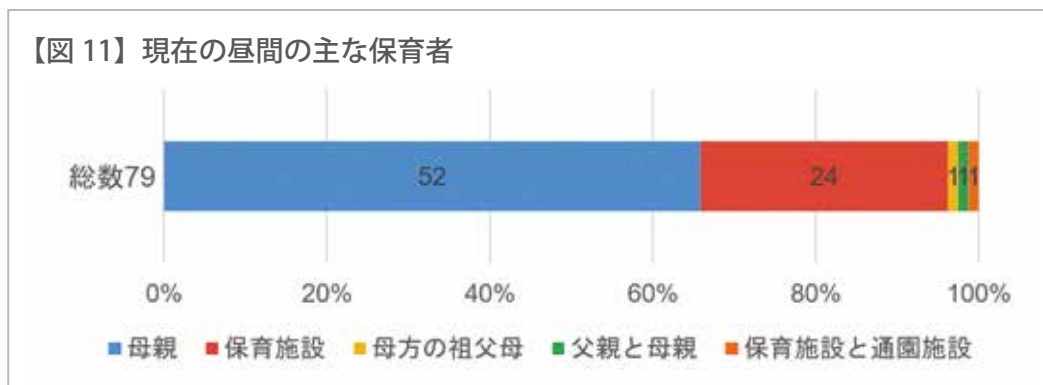
現在の子育ての場所は自宅が72件（91.1%）里帰り中の実家5件（6.3%）、実家1件（1.3%）、義父母実家1件（1.3%）であった。【図9】



現在、多胎児の他に兄弟姉妹がいる家庭は35件（44.3%）、なしは44件（55.7%）であった。【図10】

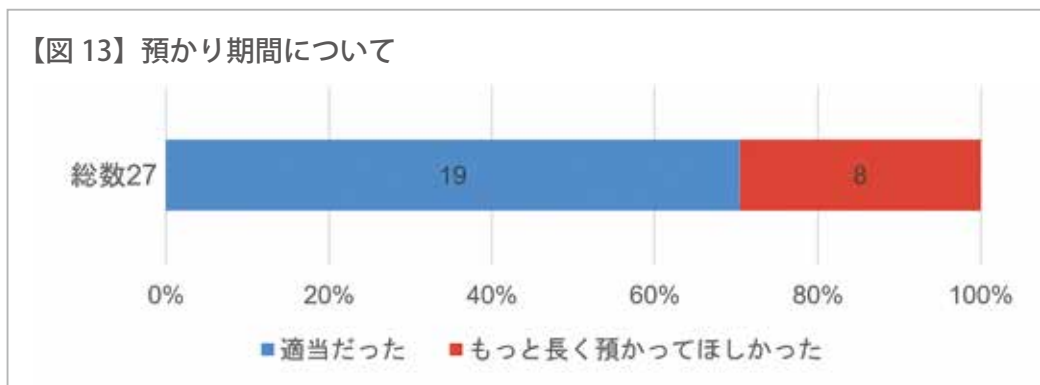
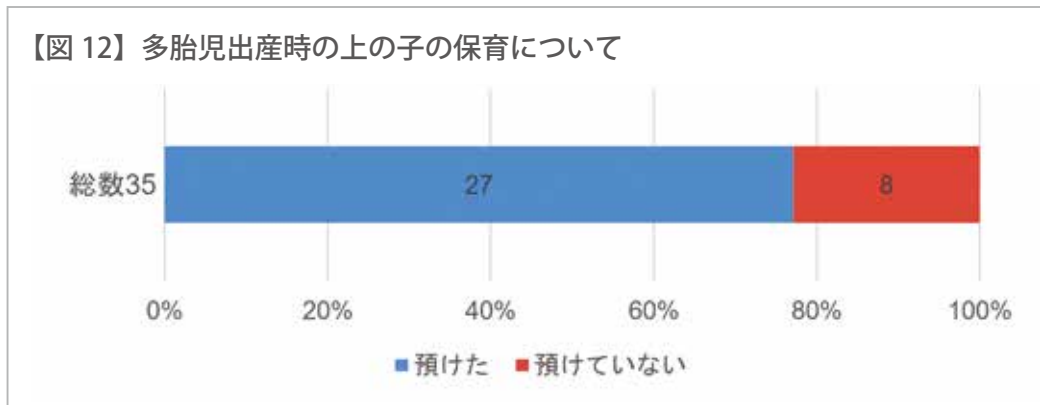


現在の昼間の主な保育者は、母親52件、保育施設24件、母方の祖父母1件、父親と母親1件、保育施設と通園施設1件であった。【図11】 保育施設には、0歳から預けている2件、1歳から16件、2歳から5件であった。



2. 多胎児出産の際の上の子どもの保育について

多胎児の出産の前後に、上の子どもの保育園などに預けた家庭は27件、預けなかった家庭は8件であった。【図12】また預かり期間が適当であったとした家庭は19件、もっと長く預かって欲しかったという家庭は8件であった。【図13】



もっと長く預かって欲しかった、という理由について、「産前2ヶ月では送迎もかなりしんどく、それより前から見て欲しかった」「産前2ヶ月体が重く、外出することが大変に感じたため」「頻回授乳、離乳食、オムツ替え、お昼寝の寝かしつけ、ほぼ2人に時間をとられ上の子放置、まだ2歳だったので甘えたいのに、逆にイライラをぶつけてしまっていた」など多胎妊娠の負担や育児の大変さにより長く預かって欲しかったという理由が多かった。【表14】

【表14】出産時に上の子どもの保育園などでもっと長く預かって欲しかった理由

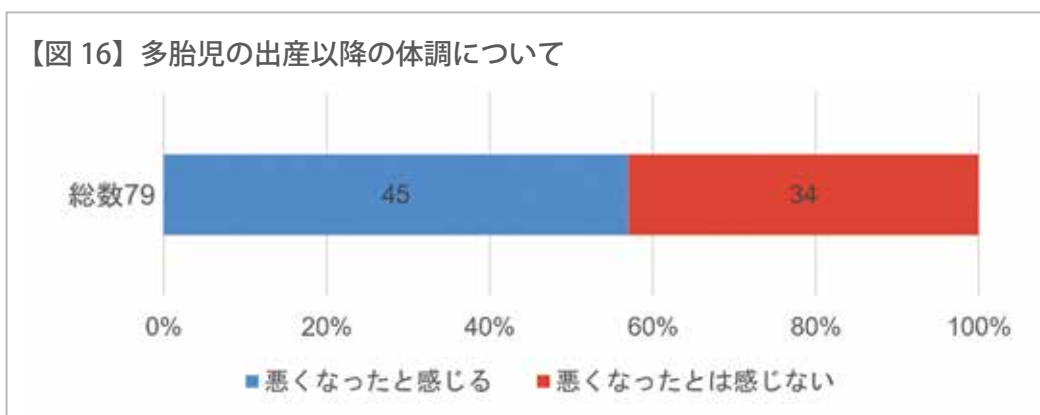
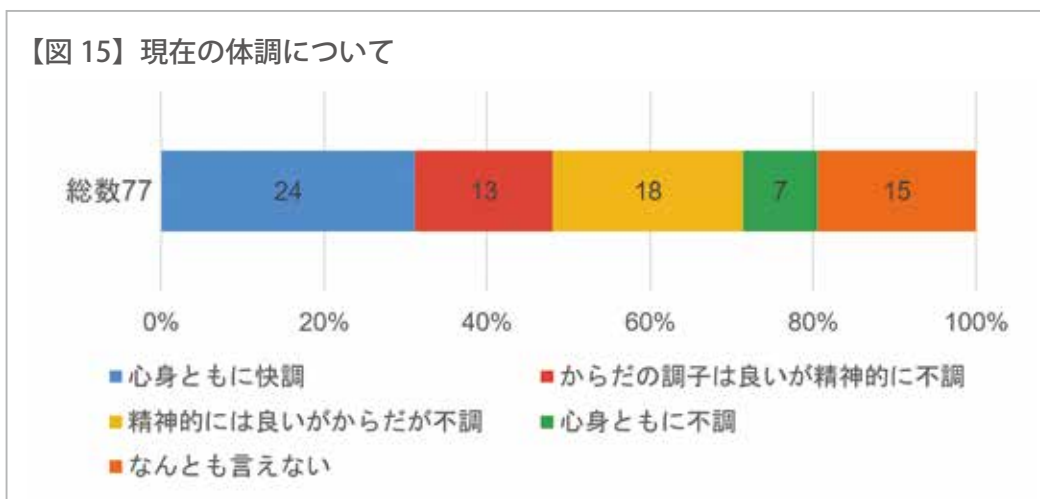
| | |
|-----------------------|--|
| 産前も預かって欲しかった(3) | <ul style="list-style-type: none"> 産前2ヶ月では送迎もかなりしんどく、それより前から見て欲しかった。 産前2ヶ月体が重く、外出することが大変に感じたため。 後半は体を動かすのが本当にしんどかったので、産前3ヶ月くらいから預けたかった。 |
| 生後半年くらいまで預かって欲しかった(2) | <ul style="list-style-type: none"> 産後6ヶ月くらいまで。幼稚園に転園したが、早く帰ってくるから相手するのが大変だったから。 生後半年くらいまで。双子の下の子が入院していたため。 |
| 生後1年くらいまで預かって欲しかった(1) | <ul style="list-style-type: none"> 1年 頻回授乳、離乳食、オムツ替え、お昼寝の寝かしつけ、ほぼ2人に時間をとられ上の子放置、まだ2歳だったので甘えたいのに、逆にイライラをぶつけてしまっていた。 |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> 夫育児中も預かってほしかった。 |

母親への調査の結果

1. 多胎児の母親の体調

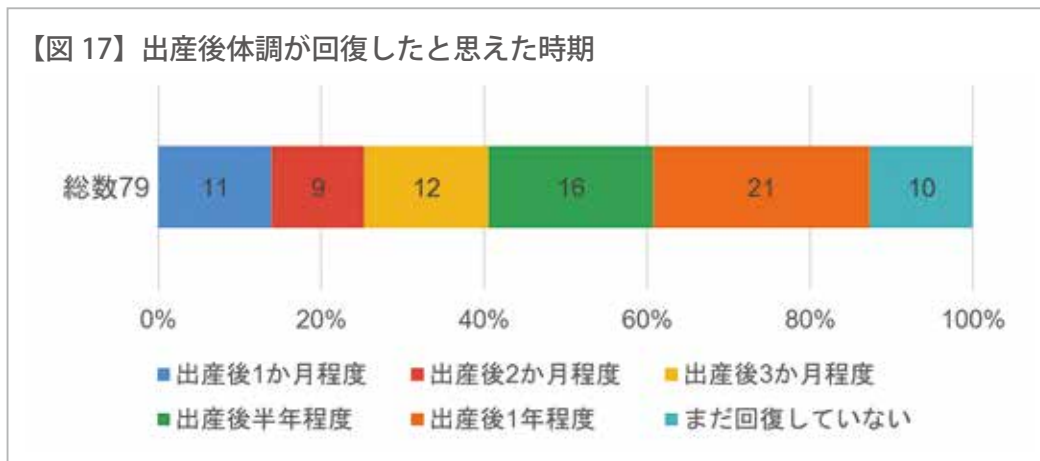
1) 現在の母親の体調

現在、心身とも快調である、と回答した母親は、24名(31.2%)であった。からだの調子は良いが精神的に不調、と答えたのは13名(16.9%)で、精神的には良いがからだの不調、と答えたのは18名(23.4%)であった。また心身とも不調という回答は7名(9.1%)であった。何とも言えないという回答は15名(19.5%)であった。【図15】多胎児の出産以降、体調が悪くなったと感じる母親は45名(57%) そうでない母親は34名(43%)であった。【図16】



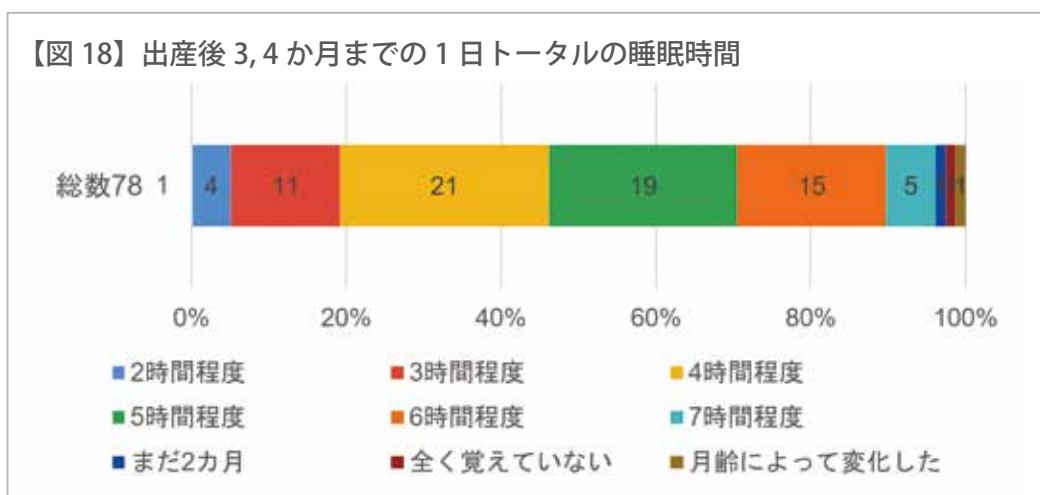
2) 産後の体調の回復

多胎児の出産後体調が回復したと思えたのはいつ頃か、という問いに対し、出産後1か月程度という回答は、11名(13.9%)、出産後2か月9名(11.4%)、出産後3か月12名(15.2%)、出産後半年程度16名(20.3%)、出産後1年程度21名(26.6%) まだ回復していないが10名(12.7%)であった。【図17】 出産後半年から1年以上回復にかかるというのが46.9%であり、いまだに回復していない人も含めると60%近くあった。



3) 睡眠時間

出産後3,4か月までの1日トータルの睡眠時間は、4時間程度が最も多く21名(26.9%) ついで5時間程度が19名(24.4%)、6時間程度が15名(19.2%)であった。一方2時間程度が4名(5.1%)、3時間程度が11名(14.1%)であった。4時間以下の睡眠時間の母親が36名(46.1%)であったことがわかる。【図18】



2. コロナ禍での母親の不安や困りごと

1) コロナ禍での出産について

【面会制限があり、夫や実母、上の子など入院中または自宅でも会えなかったのが不安や残念な気持ち】という回答が10件であった。具体的には「入院中の面会や立ち合いが無いことがすごく心細かった。1人目は間に合わず立ち合い出来なかったのが、次こそはと思っていたのでなおさらだった。」や「家族と会えない事が寂しかった。」という回答があった。また【産前の指導がなく、育児のことが学べなかったり産後に困った】という回答が9件あげられた。「母親教室がなく出産までネットの情報を頼るしかなかった。」「全ての関わりを絶たれてしまった感じで、話し合ったり教えてもらったり聞いたりという機会がほぼ無く、何がわからないのかもわからず、疑問すら持てないことが多かった。そのため、産後に気づき後悔したり悔しくなったりした。」などという回答があった。「コロナに感染するかもしれないという不安があった」は3件あげられた。【表19】

【表19】 コロナ禍での出産で不安だったこと困ったこと

| 分類 | 記述内容抜粋 |
|--|--|
| 面会制限があり、夫や実母、上の子など入院中または自宅でも会えなかったのが不安や残念な気持ち (10) | <ul style="list-style-type: none"> 入院中の面会や立ち合いが無いことがすごく心細かった。1人目は間に合わず立ち合い出来なかったのが、次こそはと思っていたのでなおさらだった。 出産前の入院から面会がほとんどできなく、出産後も主人、実母すら面会できなかったのは辛かった。 上の子に会えない。 家族と会えない事が寂しかった。 初めの出産だったので、制限で受診や面会などが一人が多かったのが心細かったつわりも長く、母や妹が食べれそうな物を買ってきてくれたが、接触は避けていたので玄関に置いてもらったりしていた。 出産時主人に立ち会ってもらいたかったのが残念だった。 面会制限があることで1人で過ごす時間が多く、気楽なような不安な気持ちがあった。15歳以下の子どもの面会はできず、入院期間中の上の子のメンタルケアが大変だった。 |
| 産前の指導がなく、育児のことが学べなかったり産後に困った (9) | <ul style="list-style-type: none"> 母親教室がなく出産までインターネットの情報を頼るしかなかった。 出産前の産婦人科の指導がほとんど無くなってインターネットで予習するしかなかった事。 全ての関わりを絶たれてしまった感じで、話し合ったり教えてもらったり聞いたりという機会がほぼ無く、何がわからないのかもわからず、疑問すら持てないことが多かった。そのため、産後に気づき後悔したり悔しくなったりした。 上の子を受診時に連れていけなかったことや入院中に面会できなかったこと。 パパママ教室や離乳食教室の中止で知識を得る機会と他の妊婦さんと触れ合う機会がなかった。 パパママ学級などパパが育児について学ぶ機会がなかったこと。 パースプランを聞かれなかった。 初めての出産だったため、母親学級がなかったのは不安でした。 |
| コロナに感染するかもしれないという不安があった (3) | <ul style="list-style-type: none"> どこでコロナの人に遭遇するかわからない不安があった。 感染への漠然とした不安があったのでマタニティライフを充実できなかった。 出産前の買い出しなどが十分にできなかった。 |
| 双子ママと会って話す場がなかった (1) | <ul style="list-style-type: none"> 出産後の方が相談したい事がたくさんあったが、双子ママと話せる場がなかった事。 |
| コロナのため病院に安全な対応をしてもらえないかどうが不安だった (1) | <ul style="list-style-type: none"> NICUのある病院でクラスターが発生して一時的に救急搬送を停止していた。その頃が出産予定日の1ヶ月程前で早産の危険がある状態だったので、万が一何かあったときに対応してもらえないかもしれないという不安があった。 |

2) NICU での面会制限について

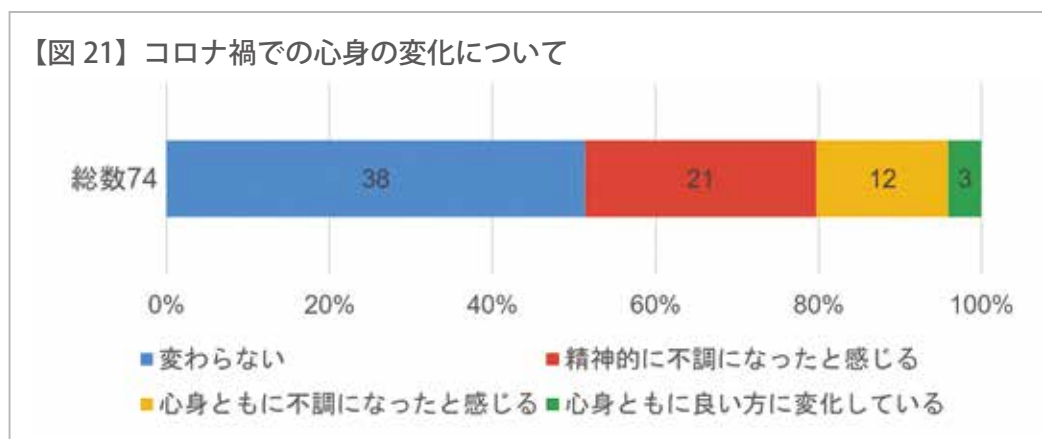
コロナ禍において NICU に入院した多胎児の面会については、時間制限があった、夫が児に会えなかった、実母が児に会えなかった、など制限があって困ったことへの回答があった。【表 20】

【表 20】 NICU で面会制限があったことについての思い

| 分類 | 記述内容抜粋 |
|---|--|
| 面会の制限があり夫と一緒にに行けなかったり、時間が限られていて残念だった (12) | <ul style="list-style-type: none"> 原則ひと家族 1 人しか入室できず、夫と一緒に会いにいけなかったのが残念だった。 会いにいける時間がとても限られている。 主人が退院まで会えずかわいそうだった。 面会が両親のみに制限されていたので、退院するまで祖父母に孫の顔を見せてあげられず、正直残念でした。 自分のみしか子供と NICU で会えなくて、主人が退院後の生活や、看護師の話を聞けなかった。 生まれて 1 ヶ月 NICU にいた子どもに夫が一度ガラス越しに見えただけだった。子どもの成長過程や不安も共感しづらかった。 NICU には自分か夫しか入れず、(産褥期のため) 運転を控えていた時に実母は送迎のみで子供に合わせられなかった事、送り迎えだけの為にきてくれることが申し訳なかった。 上の子をつれていけないので預かってもらうのが大変でした。 |
| 出産後ほとんど児に会えず母親になった自覚がもてなかったり、育児の練習もできなかった (2) | <ul style="list-style-type: none"> 出産後、退院するまでほとんど会えなかったから、母親になった自覚がなかったし、子供のことが心配だった。 1 ヶ月リモートでの面会しか出来なかったので育児練習が出来なくて不安だった。我が子に母親でさえ会えないのはとても寂しかった。 |

3) コロナ禍での心身の変化について

コロナ禍で心身の調子に変化があったかという問いには、「変わらない」が最も多く 38 名 (51%) であった。「精神的に不調になったと感じる」が 21 名 (28.4%)、「心身共に不調になったと感じる」が 12 名 (16.2%) であった。一方「心身とも良い方に変化している」は 3 名 (4.1%) であった。【図 21】



4) コロナ禍の育児について、子どもの遊び場や施設が閉鎖になったり 人数制限されている状況についての意見

コロナ禍での子どもの育児環境の変化については「外出できないことによる大変さや弊害がある」(10)が最も多く、その内容としては「外出できる場所が減り、身体的・内面的な成長が不安」「外出できず子どもが癩癩を起こす」「家に引きこもりがちになる」「外出できないため一日が長い」「家の中の遊びは限界がある」「親子ともに息抜きができない」「ママ友ができづらい」があげられた。他に「ストレスの増大(6)」「利用できる施設がなく困っている(6)」「人数制限などの工夫をして利用できる施設を確保してほしい(5)」などがあつた。【表 22】

【表 22】 コロナ禍での育児環境の変化について（回答数：40 件）

| 分類 | 記述内容 |
|--------------------------|--|
| 外出できないことによる大変さや弊害がある(10) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 家族以外の人と全く交流ができず、家からも出づらいつ況で、子どもたちの育児に影響がでないか不安がある。 ・ 子供を連れて行ける外出先が減っていて退屈させたり運動不足になりそうで不安。 ・ 成長期の子どもにとって、色々な経験が出来る場が少なくなるのは身体的にも内面的にも成長が心配。 ・ 子供同士が遊べる場所がなくなったため、家だけでの遊びで発育やストレス発散、感情などの刺激が足りてないのではないかと感じてしまう。 ・ 子どもが「ここに遊びに行きたい！」と言っても、連れて行けなくて、癩癩を起こしがちになる。 ・ 家に引きこもりがちになって、他人とますます関わることがない。 ・ 遊びに行くところがない。子どもを外に連れていきにくいので、1日長く感じる。 ・ 家の中で遊ばせるには限界がある。 ・ 親子ともに息抜きができない。双子がいるので上の子を散歩に連れていくのもなかなかしてあげられない。 ・ 同年代の友達ができにくい。外に出ないと、ママ友もできないのでつらい。 |
| ストレスの増大(6) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 家ばかりだと子どもだけでなく親もストレスがたまる。雨が降ると公園にもいけず家のなかが大変なことになる。 ・ 家の中だけで過ごす為、ストレスが溜まり精神的に辛い。 ・ 家だけでは自分もストレスが溜まる。 ・ 雨の日は特に遊べる施設を利用していた為、どうやって遊ばせようか悩みストレスがたまる。 ・ 家にいると親も子もストレスが溜まる。発散の場がなくイライラして家庭環境が悪くなる。 |
| 利用できる施設がなく困っている(6) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自宅以外遊べる場所がないから困る。 ・ ショッピングモールでこどもが遊べる場所がことごとく閉鎖になっていて困る。 ・ 緊急事態宣言が出ているので仕方ないことだと思うが、児童館などお休みになると連れていく場所がなくなってしまふ。 ・ 感染も怖いけど支援センターが閉鎖になったのは辛い。毎日0歳の双子と自分だけだと気晴らしができない。 ・ 他の子供達とのコミュニケーションの場が無いと、せっかく人慣れしてきたのに残念。半年後に保育園に入れたいので大勢の環境に慣れさせたい。早く施設の閉鎖を解除してほしい。 ・ 動くようになって施設を利用したら割りと子供も親もリフレッシュできて良かったな一と思った矢先に閉鎖になったので、残念。 |

【表 22】 コロナ禍での育児環境の変化について（回答数：40 件） ※前ページより続き

| 分類 | 記述内容 |
|--|---|
| <p>人数制限などの工夫をして利用できる施設を確保してほしい (6)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 人数制限があってもよいので感染対策下でそういった場の提供があるとよい。 • 児童センターが閉鎖されているが、常駐のスタッフがいるので人数制限の管理などできるのでは。 • まだ子どもたちは歩けないので本当に連れていける場所がない。動きたくてベビーカーに長時間乗ってられないので公園散歩もほとんどできない。児童センターや支援センターを休館にするのはやりすぎなんじゃないか。人数や時間を制限してでいいので開けてほしい。 • 住んでいる町内のコミュニティセンターは、ただでさえ週に2日しか開いておらず、近所に公園もなく、子どもを遊ばせる場所がない。週に2日くらいのコミュニティセンターなら、緊急事態宣言下でも開いてほしい。町外の子育て支援センターなどは、コロナ以来、その町内・市内の子どもしか利用できなくなり、困っている。 • 遊びに行く場所が制限され、家ででの時間をどう過ごすか悩む。もっと地域に充実した公園があったらいいのと思う。 • こども館は、ほぼ通っていたので困りました。公園は暑くて行けないし、お家でプールばかりしています。 |
| <p>外出しないことによるメリットがあった (3)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • もともと家が好きなので、逆に子供を外につれていけない事についてのうしろめたさがなくなった。双子だし他に兄弟もいるのでわざわざ児童館とか行く必要ないと思う。 • まだ小さいので、連れ出すことがないのでわからない。 • 外出が億劫だったので出かけなくてよくなり過ごしやすくなった。 |
| <p>マスク着用の大変さ (2)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • どこへ行くにもマスクマスクで困る。出来る子も居ると思うがうちの2才児には難しい。 • いつも行っていた施設が閉館になりまだ理由を告げても理解出来ず行きたいと駄々をこねられる。散歩させてもマスクさせるべきだと言われて窮屈に感じる。マスクさせているが片方の子はヨダレがめちゃうちゃ多く15分に1枚必要となりとても大変。 |
| <p>感染が気になって利用できない (2)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 遊べる場所が減っていてあっても混み合っていて感染が不安で利用しにくい。 • コロナだけでなく、RS ウイルス等の感染症への懸念があり子育て支援センターに連れて行くのをためらう。 |
| <p>その他 (5)</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 支援センターに長い時間居れない。予約がとれない。市外の支援センターの方が近く使いやすいのに使用できない。 • 子ども達がよく動くので制限も多い中利用は厳しい。 • 多胎に限らず、どの育児家庭も外出制限は同じ。機会が減っていることは確かだが、コロナ禍でなかったとしても1人で2人の子どもを遊びに連れて出る事は難しかったかもしれない。 • せっかく2人を車に乗せて遊ばせられる施設へ行っても人数制限があり入れなくて待つにしても暑いし機嫌悪くなるので、なかなか待てなくて待機場所などあれば良いのかなと思った。 • しかたがないと思う。 |

5) コロナ禍においてファミリーサポートの利用についての意見

ファミリーサポートについては、【コロナの影響でやめた】という意見が最も多かった。【表 23】
「ファミサポに同時に二人を預けることができないため大変である」「保育園の一時預かりも利用できない」
「子どもの集団を大人数人で見てもらえる場所でない」と安心できない」などの意見があった

【表 23】 コロナ禍においてファミリーサポートの利用についての意見（回答数：11 件）

| 分類 | 記述内容 |
|---------------------------------|---|
| コロナの影響で利用をやめた (5) | <ul style="list-style-type: none"> サポートを利用したことはないが、コロナの影響で利用すること自体を諦めた。 コロナの感染について常に心配が付きまわってしまっただけでなかなか頼りたくても頼れない。本当に必要なときがわからない。 第三者が家に来ることでの感染に対する不安はあります。疑うわけではないけど、今回のデルタ株はより注意が必要なのかな、、、と感じました。 最近子どもが熱を出して、本当に困っているが、コロナ禍ということもありサポートしてくれる人に頼みづらい。 使いにくい。お互いコロナに感染したら、させたらどうしようか?と思うため。 |
| 利用に不便は感じていない (2) | <ul style="list-style-type: none"> ぎふ多胎ネットの方がコマメにご連絡下さるので全く不便とは思いません。 健診サポートをお願いしたら自治体も検温を条件に快く引き受けてくれた。感謝でした。 |
| 預けることをためらう | <ul style="list-style-type: none"> 一時預かりに預けるのをためらう。 |
| ファミサポに同時に二人を預けることができないため大変である | <ul style="list-style-type: none"> もともとファミサポは話を聞きに行ったときに「一人のサポーターに子供一人しか預けられない」と聞き、上の子の参観日に行くときなどはそれなりに高額の託児所を利用した。ファミサポは二人の方と事前に面談し、二つの家に送り届けるなどは大変すぎて現実的ではない。 |
| 保育園の一時預かりも利用できない | <ul style="list-style-type: none"> 公立保育園の一時預かりは何ヵ所も問い合わせたが利用できたことはない。 |
| 子どもの集団を大人数人で見てもらえる場所でない」と安心できない | <ul style="list-style-type: none"> 言葉を話せない年齢の子供を個人のお宅に預けるのは考えられない。子どもに何かされても親に報告もできない。集団を大人数人でみるような所でないと安心して預けられない。 |
| 申し込んだが面談中止となり、その後利用ができないままだった | <ul style="list-style-type: none"> 申し込んで面談が流れたままになり利用ができなかった。こちらから連絡して面談中止と連絡があったくらいで利用が出来なくなることで困っていないかなど役場から連絡などはなく行政のサービスの行き届かなさにもやっとした。 |
| 不便を感じる | <ul style="list-style-type: none"> 感じる。 |

6) コロナ禍での育児で困っていることと必要な支援についての意見

コロナ禍において困っていることをふまえ、必要な支援について意見を求めた。困っていることとして、【外出できない】については、「外出ができず子どもに経験をさせることができない」「子供が遊ぶ施設を使いつらい」「外出できずストレスがたまる」などの回答があった。また【子どもを預けることが大変である】などの回答があった。【表 24】

【表 24】 コロナ禍での育児で困っていること（回答数：10 件）

| 分類 | 記述内容 |
|---------------------|---|
| 外出できない (5) | <ul style="list-style-type: none"> 外出ができず、動物園や水族館に行く等の、こどもに多様な経験をさせてあげられない。 子供が走り回れる屋内施設が使いづらい事 外出して気分転換したいのにできなくてストレスが溜まりそう。 子どもたちの他の友達と遊ぶことなどの経験ができないのが困っている。 外出しにくい |
| 子どもを預けることが大変である (2) | <ul style="list-style-type: none"> 上の子の預りが一番大変でした 引きこもりがちになるので母親が子供から離れられず人と会話もできず精神的に追い詰められる。休みたいという理由だけでも一時預かりを利用しやすいようにしてほしい。 |
| 症状があると周りの目が気になる | <ul style="list-style-type: none"> 周りの目が怖い。小さい子なので鼻水が垂れることもある。くしゃみすることがある。双子なのでうつしあうので周りの目が痛くて仕方ない。 |
| 仕事を休むための休暇が足りない | <ul style="list-style-type: none"> 少し風邪症状や発熱があるだけで、最低 2 日間は保育園を休まなければいけなくて、病児保育の施設もないため、仕事を休みがちで有休や子の看護休暇が足りない。 |
| 経済的な不安がある | <ul style="list-style-type: none"> 多胎だと一気に二倍出費があるので、経済的なことを考えてしまう。 |



これをふまえ、コロナ禍においてあると良い支援として、「子供が遊ぶ施設や親子の交流の場があると良い」「相談やつながりができる支援を充実してほしい」「外出ができないため、日中の過ごし方のアドバイスがあると良い」などがあげられた。【表 25】

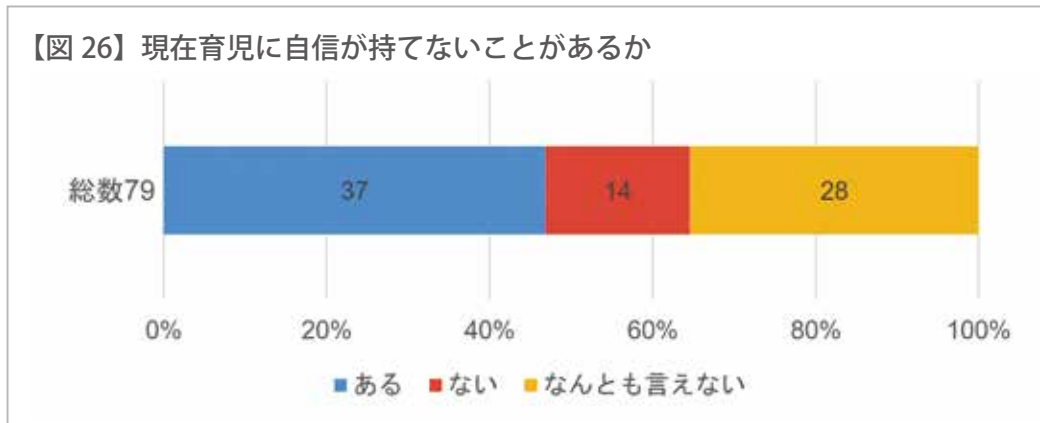
【表 25】 コロナ禍での育児にあると良い支援（回答数：11 件）

| 分類 | 記述内容 |
|---|--|
| 子供が遊ぶ施設や親子の交流の場があると良い (6) | <ul style="list-style-type: none"> • 子供が安全に雨でものびのび遊べる場所がほしい。 • 一人でしゃべれない子どもを 24 時間みるのは大変なので、家以外でも子どもたちを安心して遊ばせられる場所がほしいです。 • 子どもを家以外の場所でのびのびと遊ばせたい！が、できません。屋外でも屋内でも、小さな子どもが安心して遊べる場所がもっと増えてほしいです。 • 子どもが遊べる場が減ってしまったことが残念。子どもたち同士の交流も減ってしまったので残念。子育て中の親同士の交流場があるといいなと思う。 • 転勤族で祖父母の支援が遠方で受けられない家庭のみの zoom があれば参加したい。 • やはり双子のお母さんと直接交流できなかったのが残念。未だにそういった方はいません。 |
| 相談やつながりができる支援を充実してほしい (2) | <ul style="list-style-type: none"> • 閉塞感や孤独感を感じ易い社会情勢なので繋がりを感じることができるよう支援が充実してくるとよいと思う。 • しんどい時にしんどいと言いやすくなる環境作り。気軽に家族以外にも相談できる窓口があることを発信して行くことだと思います。 |
| 外出ができないため、日中の過ごし方のアドバイスがあると良い | <ul style="list-style-type: none"> • お家でしか遊ばせることができないので、日中の遊ばせ方や時間の過ごし方などのアドバイスがあると助かる。 |
| 外出できないため、おしゃべり会のほかに保健師による育児教室や離乳食教室があると良い | <ul style="list-style-type: none"> • 日中、子どもたち以外誰とも接することなく、買い物にも出ず、毎日家の中で過ごしている。リモートで多胎ネットのおしゃべり会に参加させてもらっていてとても気晴らしになる。おしゃべり会の他にも、保健師さんにもアドバイスを頂ける育児教室や、離乳食講座などがあると助かるかもしれないと感じた。 |
| ファミサポの自宅に連れていくのではなく、自宅に来てもらうことができる良い | <ul style="list-style-type: none"> • 上の子がオンライン授業をしているが、もしこの状態で双子が赤ちゃんだったらさぞかし大変だろうと思う。上の子を親がサポートするには日中に大人の手が必要になる。ファミサポさん宅に連れていくのではなく、自宅に来てもらえることを選べるなら利用したい方もみえるのではないかなと思う。 |

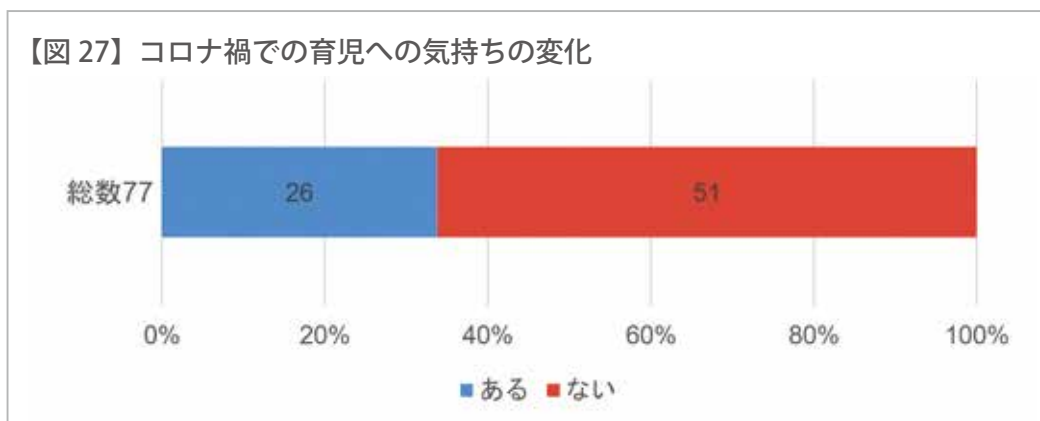
3. 多胎育児の現状

1) 現在の育児への自信について

「現在育児に自信がもてないことがある」母親は 37 名 (46.8%) であった。「ない」は 14 名 (17.7%)、「なんとも言えない」が 28 名 (35.4%) であった。【図 26】



コロナ禍での育児への気持ちの変化については「ある」と答えた母親は 26 名 (33.8%) であり【図 27】、その内容は「感染への配慮から子供にいろいろと制限するようになった」「外出がしにくくなり人と会えなくなりストレスがたまる」「実家に頼りにくい」などの回答があった。具体的な内容は【人と接することを避けるようになった】という回答が多く「感染させないために、色んなことを制限させるようになってしまった。外出しない、あちこち触らないなど」や「通常なら利用できたであろう施設が閉鎖される等で外出がしにくい状態なので、いつまでたっても家に引きこもらなければいけないのがしんどい。子どもにもっとたくさんの新しい経験をさせてあげたいのにそれができないのが辛い。」「ストレスが溜まる」「子育てに自信がなくなった」などの意見があった。【表 28】

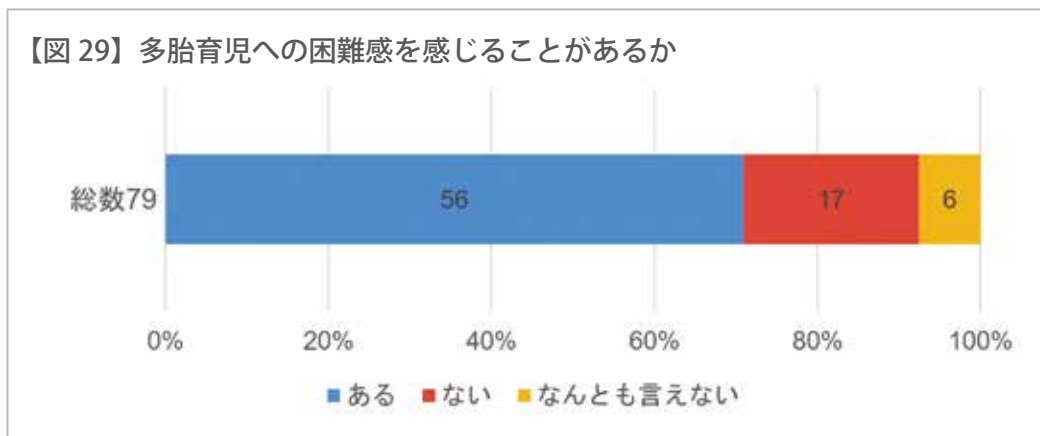


【表 28】 コロナ禍での育児への気持ちの変化（25 件）

- 感染させないために、色んなことを制限させるようになってしまった。外出しない、あちこち触らないなど。
- 通常なら利用できたであろう施設が閉鎖される等で外出がしにくい状態なので、いつまでたっても家に引きこもらなければいけないのがしんどい。子どもにもっとたくさんの新しい経験をさせてあげたいのにそれができないのが辛い。
- コロナ前は色んな場所で色々ママ友、双子ママ友と遊んでいたが遊ぶ所や遊ぶ人を選ぶようになった。
- 人混みを避けて出かける。もしくは、あまり出かけない。
- 保育園の体調不良に関する規定が厳しくなった。双子の片方が体調不良の場合、元気な方も欠席せざるをえない。
- コロナを理由に外出出来なくなった分、家でゆっくり過ごすことに罪悪感が無くなった。
- 人に会えなくて孤独。
- 出かける事が困難になり、感染しない様感染対策に気を遣っている。
- 絶対に子どもには感染させないようにしたいと思っている。
- 些細な相談をする機会が減った。
- お出かけがあまりできなくなりストレスが溜まっている。
- 楽しみにしていた、予定などがなくなる。夏場は特に、家に籠もりがちで病む。
- 実家が県外なので、以前より頼りにくくなった。
- 守らなければという、さらに強い気持ち。
- 外出が難しい環境になったため、子供たちの成長へ悪影響があるのでは…と心配になることがあります。家では経験出来ないことを経験させてあげたいです。
- ストレスが溜まる。
- 外出に消極的になった。
- 外に出かけにくくなり、子どももストレスが溜まっていると思うが、その様子を見て母である私もストレスが溜まる。
- 元々外出が好きではないので、堂々と引きこもっていられるので気が楽。
- 支援センターなどで人に会わないようになった。
- まだ保育園などに通っていないので他人との関わりが薄くなって、コミュニケーション能力の成長に影響が出るのが心配で、せめて家庭でたくさん会話をしなければと思う。
- 閉園などで毎日一緒に過ごす日々が続いたが、仕事でバタバタ過ごす日々より満たされていて幸せな期間だったと感じた。
- 気分転換や他家庭との関わりが減り閉塞感を感じる機会が増えた。
- 子育てに自信がなくなった。
- 制限された生活の中で、子どもたちをどう育てようかと悩みました。

2) 多胎育児の困難感

多胎育児への困難感を感じるかどうか、という問いについては「ある」が56名(70.9%)であった。【図 29】具体的な困難感については自由記載であげてもらった。その結果を【表 30】に示す。最も困難に感じることは、【多胎児を連れての外出が大変である】ことであり35件の記述があった。次は【同時に児が泣いたりぐずること】(19件)、【複数の子どもの世話】【十分多胎児それぞれに関わることができない】【多胎児が喧嘩をすること】【寝てくれないことや睡眠について】など同じ年齢や月齢の子どもたちを同時に育てることに伴う困難感が明らかになった。さらに【自分の時間を確保できない】【精神的にも体力的にもしんどい】【家事が思うように進まない】など母親の負担感があげられた。



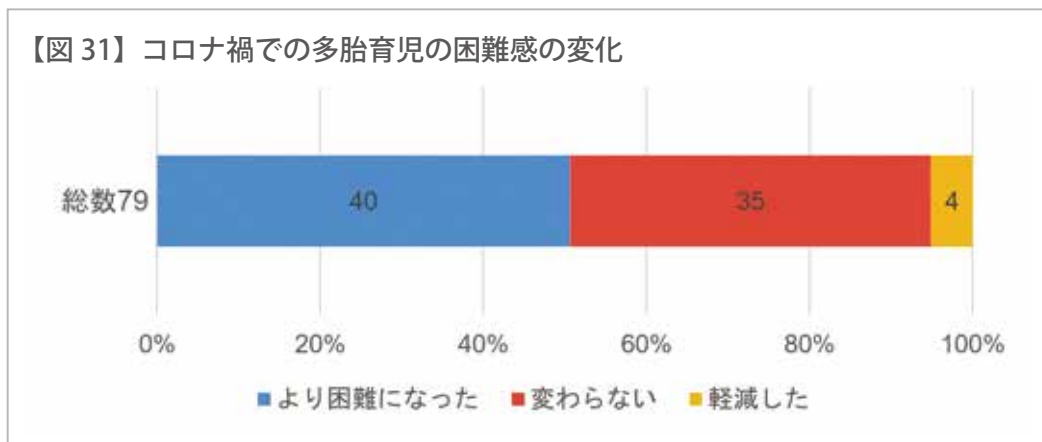
【表 30】多胎育児で困難に感じていること

| 分類 | 記述内容抜粋 |
|-----------------------------|--|
| 外出が大変である (35) | <ul style="list-style-type: none"> • 保育園の送迎。 • 公共交通機関の利用。 • 食料品の買い物。 • ちょっと出かけるというのができない。 • 大人1人で2人を連れて出かけられない。 • 外出するのにかなり気合がいる。 • 親ひとりで子ども2人を見るのに限界を感じる。(特に自宅外で。) • 予防接種など病院に2人同時に連れて行く時に大人1人だと大変。 • 雨天時の保育園のお迎え。 • 母一人で双子を連れて出かけるのが至難の技。 • 買い物など外出しなければならない時、ベビーカー+買い物かごは大変なので赤ちゃんが乗れるカートがあるお店でしか買い物が出来ない。(一人はカート、一人はおんぶで買い物) • 一人で双子を連れて出かける際に、それぞれバラバラに走って逃げて行き、一人は必ず見失ってしまう。 |
| 同時に児が泣いたりぐずること (19) | <ul style="list-style-type: none"> • 夜泣きが始まり寝不足の中で昼寝の寝かしつけを1人で1日何度もするのが大変。 • 今1人が後追いの時期で姿が無いと泣くので困ります。 • 同時泣きや交互泣き。 • 同時ギャン泣きで2人共に抱っこを要求される時。 • 1人機嫌が良くなるともう1人が悪かったり。同時に機嫌悪くても大変。 • 同時に泣いたときに対処に焦る。 • 2人が同じタイミングで主張するとき。 • 同時のイヤイヤ期とパパイヤ期。 • 性格の違いに合わせて同時に対応するのが難しい。 • 泣いても一緒に抱っこできない。 |
| 複数の子どもの世話 (食事・入浴・授乳など) (10) | <ul style="list-style-type: none"> • 離乳食。 • 食べさせるのに時間がかかる。 • 食事、風呂などすべて手間が2倍かかること。 • 同時のトイトレ。 |
| 十分多胎児にかかわることができない (8) | <ul style="list-style-type: none"> • 大人1人では2人同時には遊んであげられない。 • 2人とも(上のお兄ちゃんも含め)十分に話を聞いてあげられてないんじゃないかと思う。3人が同時に話してくるので。 • 一人一人を十分に見てあげられていない。 • 一人一人にちゃんと向き合えない気がする。 • ふれあいの時間を十分に持てていない気がする。 • 平等に扱うべきことと個人を尊重してあげなくてはいけないバランスの難しさ。 • 抱っこ、手を繋ぐ、誰が横で眠るかなど物理的に無理なことを3人から求められる時。 |
| 多胎児が喧嘩をすること (7) | <ul style="list-style-type: none"> • 双子がイヤイヤ期を迎え、下の子に授乳中等で離れていると、双子で噛み付き合ったりとケンカする。 • 兄弟間での争いの仲介が難しい。 • 親を独り占めできないため、取り合いのケンカをしがち。(しかし、子ども達を別行動にさせようとする、それも嫌がる。) • 双子のケンカが絶えない。 |

【表 30】 多胎育児で困難に感じていること ※前ページより続き

| 分類 | 記述内容抜粋 |
|---------------------|---|
| 寝てくれないことや睡眠について (6) | <ul style="list-style-type: none"> 寝かしつける時に同じタイミングで寝てくれない。 寝かしつけ、2人だけならどうにでもなるが上があるとかが時間がかかりすぎて、毎日寝る時間がストレスで、仕方ない。 寝ている子をもう1人が起こしてしまう。 |
| 自分の時間を確保できない (6) | <ul style="list-style-type: none"> 昼寝のタイミングが重ならず、休める間がない。 夜2人が起きると睡眠時間が倍削られる。 片付けなど夜中にして睡眠不足。 |
| 精神的にも体力的にもしんどい (5) | <ul style="list-style-type: none"> 自分の体力がついていけない。 精神的にも体力的にも休まる時間が半減する事。 全てにおける体力。 親の疲労感が強い。 子供が元気すぎて疲れる。 |
| 家事が思うように進まない (5) | <ul style="list-style-type: none"> 家事時間が作れない。 ゆっくりご飯が作れない。 夕食の準備が進まない。 |
| 子どもの体調が悪い時 (3) | <ul style="list-style-type: none"> 保育園に通い出しても交代で体調不良になり、結局2人同時に2週間近く休むことになった。 子どもの体調不良で仕事を休む日が多い。 体調を順番に崩しなかなか治らない。 |
| 上の子のことが気になる (3) | <ul style="list-style-type: none"> 上の子の赤ちゃん返りで手が出る。 上の子と出かけられない。 上の子たちのお世話。 |
| 金銭的な負担 (3) | <ul style="list-style-type: none"> お金がいつも倍かかる。 生活費のやり繰り。 |
| 人手不足 (2) | <ul style="list-style-type: none"> 人手が足りない。 |
| 目が離せない (2) | <ul style="list-style-type: none"> 1人1人違う所に行きたがるので私の分身が欲しい。 よく動くようになってきたので、目が離せない。 |
| 双子と上の子との育児が難しい (2) | <ul style="list-style-type: none"> 上の子のイヤイヤ期と双子の育児がバランスよく出来ない。 上の子との子育てがしづらい。 |
| 育児や子どもに不安がある (2) | <ul style="list-style-type: none"> 1人で2人を見る時間は不安を感じる事があります。 二人を比べて小さい方が心配になる。 |
| その他 | <ul style="list-style-type: none"> 多胎家庭に対する周囲の理解不足。 保育園入園ができるか。(違う園になった人の話も聞いたので) 危険を伴う。 リトミック教室など子供一人に対して大人も一人つかないと出来ないような教育機会への参加を断られてしまったことがあり、子供のチャンスを減らしてしまい申し訳ないと思うことがある。 病院等に大人1人で行けない。 旦那にもフルで育児してもらわないとまともに生活できない。 |

またコロナ禍において多胎育児の困難感はどのように変化したかということについて、「より困難になった」という回答が40名（50.6%）であり、「変わらない」が35名（44.3%）であった。【図 31】



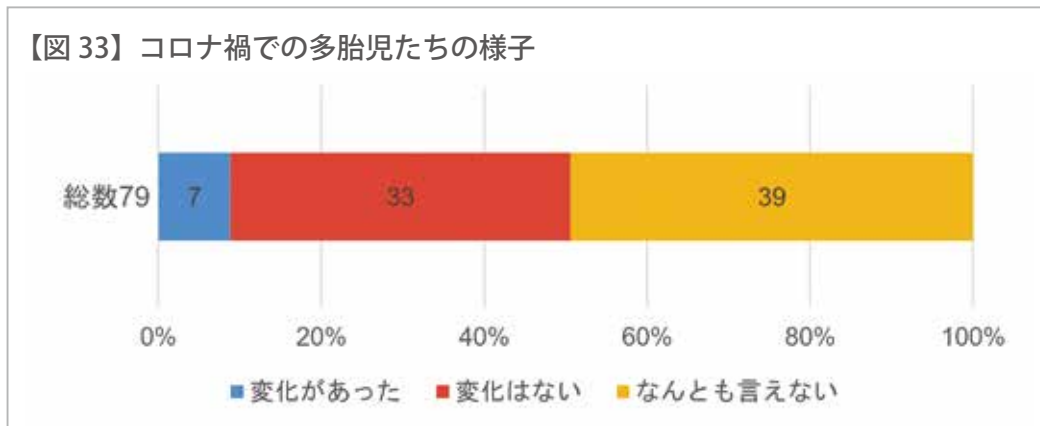
より困難になった理由については「子どもたちを連れて外出しにくい」31名（73.8%）「気軽に友達（知り合い等）と会いにくい」が27名（64.3%）、「子どもたちの交流の場に行けないことで、子どもたちの発達に不安を感じる」が19名（45.2%）などであった。【表 32】

【表 32】 コロナ禍での多胎育児がより困難になった理由（40件）

- 子どもたちを連れて外出しにくい。(31)
- 気軽に友達（知り合い等）と会いにくい。(27)
- 子どもたちの交流の場に行けないことで、子どもたちの発達に不安を感じる。(19)
- 子どもたちが外出できないことで、夜寝てくれないように感じる。(10)
- 県外への外出のハードルが高く、手伝いに来てもらいにくい。(9)
- 県外への外出のハードルが高く、実家に帰りにくい。(9)
- 人があまり居ないところしか連れて行けない。(1)
- 保育園の体調不良の園児の欠席条件が厳しくなった。(1)
- 病院へ行くのも怖い。(予防接種)(1)
- 外に行かないと1日が長く感じることもある。(1)



コロナ禍での多胎児たちの様子については変化があったという回答は7名(8.9%)であり、変化がないというのが33名(41.8%)、「なんともいえない」が39名(49.4%)であった。【図 33】



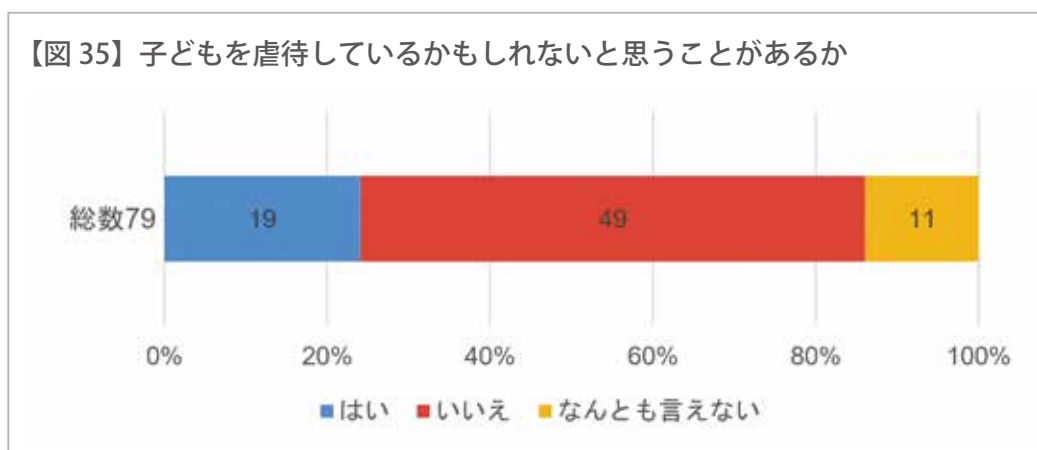
子どもたちの変化については「おうち時間が増えたので、ケンカをよくするようになった」「遊び足りない」「外出時にマスクを欠かさず自分でするようになった」などがあげられた【表 34】

【表 34】 コロナ禍における子どもたちの変化

- おうち時間が増えたので、ケンカをよくするようになった
- 遊び足りない。
- 外出時にマスクを欠かさず自分でするようになった。
- 今までよく遊んでいた友達に会えなくて、会いたがっている。〇〇に行きたい!と言うが、人が多そうなところは避けていて連れていけない。
- 家のオモチャでは飽きてしまい、階段など普段は出入りしない場所に行きたがります。安全確保が難しいので困っています(涙)。
- 児童センター、図書館等施設利用ができない。
- 出かけられないので休日特にストレスを感じる。

3) 子どもとの関わりについて

「子どもを虐待しているかもしれないと思うことはありますか」という問いについて「はい」と答えた母親は19名(24.1%)「いいえ」が49名(62%)、「なんともいえない」が11名(13.9%)であった。【図35】どのようなことなのかを聞いたところ「感情的な言葉」が最も多く20名、「たたくなど」が11名(44%)であった。【表36】

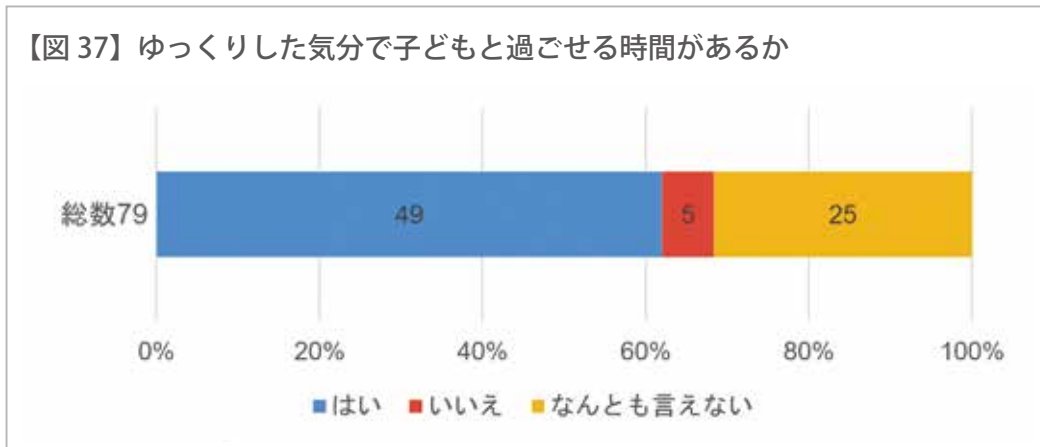


【表36】 どのようなことで虐待をしているかもしれないと思うか (25件)

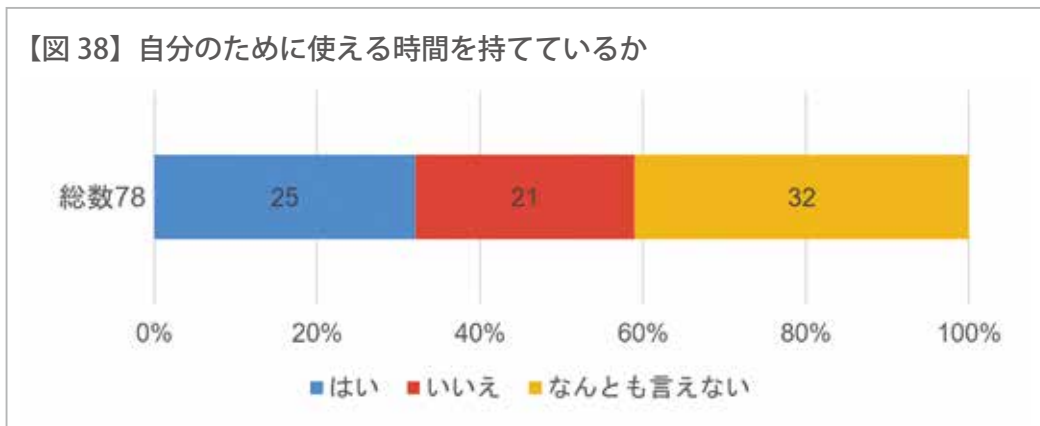
- 感情的な言葉。(20)
- たたくなど。(11)
- しつけのし過ぎ。(5)
- 食事を長時間与えないなどの制限や放置。(1)
- 大きい声で怒る。(1)
- 寝かしつけを1人ずつしているともう1人がずっと泣いているのでその時。(1)
- その場から少し離れて自分一人になる。(1)



「ゆっくりした気分でお子さんと過ごせる時間がありますか」という問いには、「はい」が49名(62%)、「いいえ」が5名(6.3%)、「なんとも言えない」が25名(31.6%)であった。【図37】



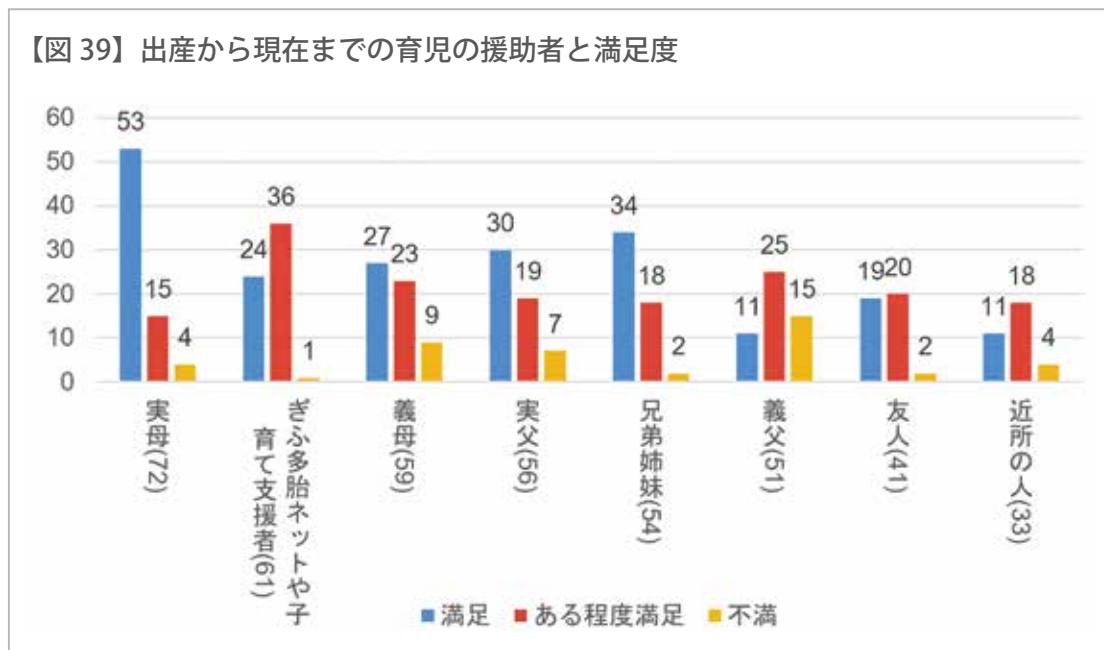
「自分のために使える時間を持っていますか」という問いには「はい」が25名(32.1%)、「いいえ」が21名(26.9%)、「なんとも言えない」が32名(41%)であった。【図38】



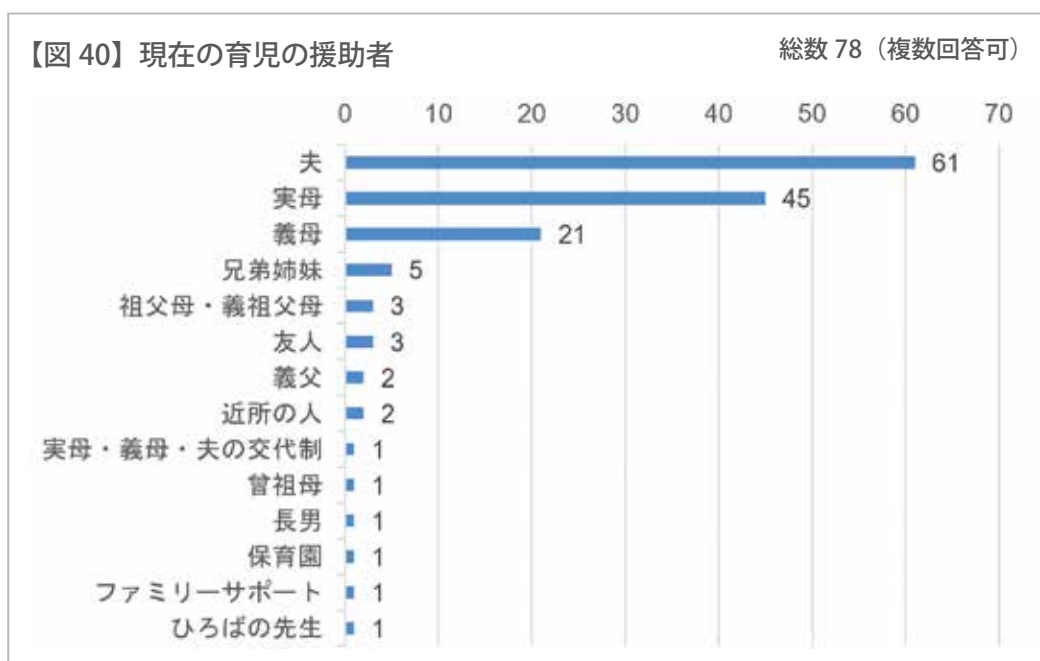
4) 育児の援助者

① 援助者と満足度

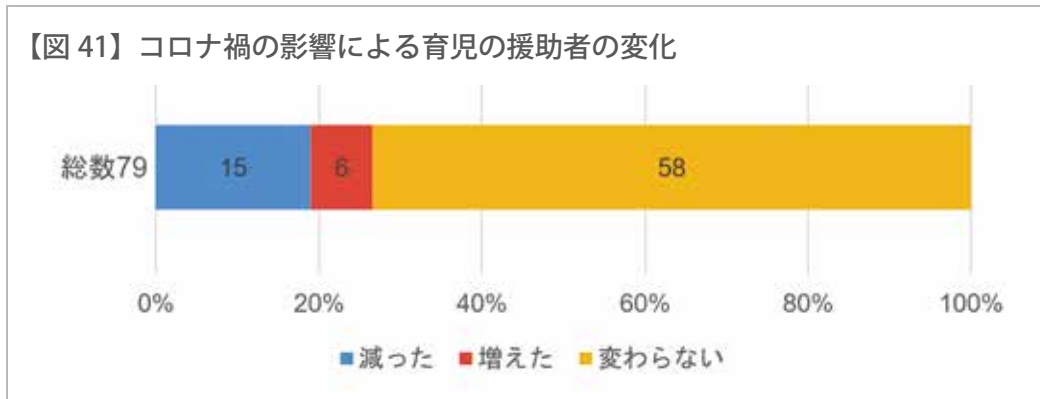
出産から現在まで「実母」を支援者とする人が最も多かった（72名）。次いで「ぎふ多胎ネットや子育て支援者」が61名、「義母」が59名、「実父」が56名、「兄弟姉妹」が54名、「義父」が51名であった。満足度は「実母」において割合（73.6%）が最も高かった。【図 39】



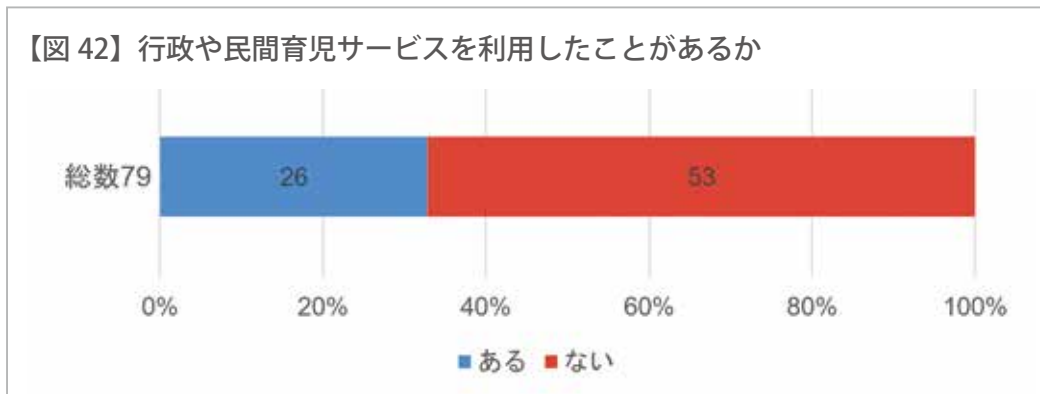
現在育児を手伝ってくれる人は、夫が61名（78.2%）、実母が45名（57.7%）、義母が21名（26.9%）であった。【図 40】



コロナ禍の影響で育児を手伝ってくれる人に変化があったかどうかは、「減った」が15名(19%)、「増えた」が6名(7.6%)、「変わらない」が58名(73.4%)であった。【図41】



「行政や民間育児支援サービスを利用したことがあるか」については「ある」が26名(32.9%)、「ない」が53名(67.1%)であった。【図42】



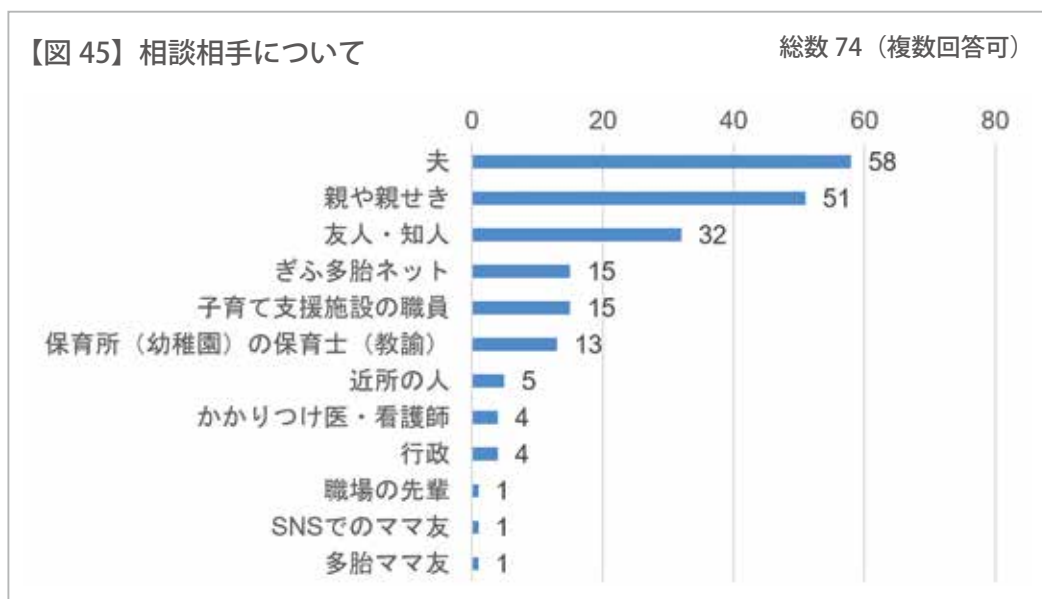
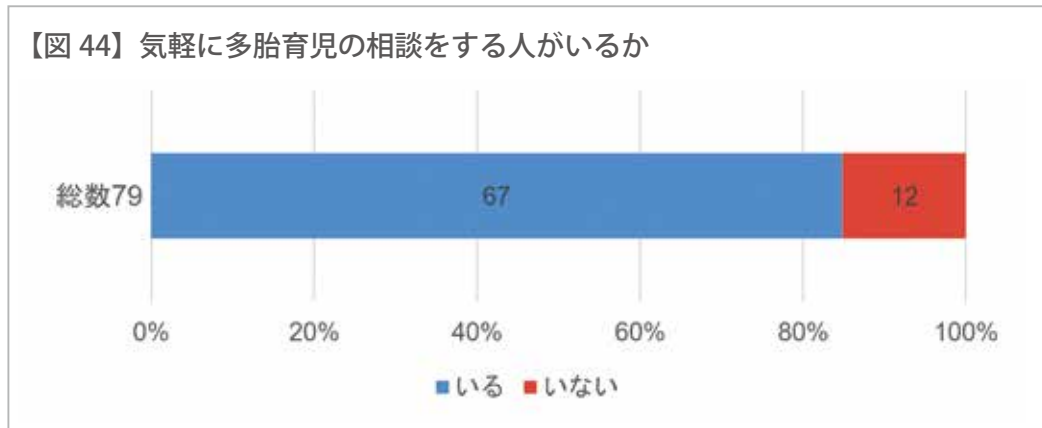
利用したサービスは「ぎふ多胎ネットの支援」が最も多く21名、次いでファミリーサポート5名、行政のヘルパー派遣2名、民間のベビーシッターサービス2名、産後ドゥーラ2名であった。【図43】



ぎふ多胎ネットの支援については、「健診の付き添いをお願いして、大変助かりました。双子育児の経験者なので、色々お話しもしやすくありがたかったです」「健診の時助かりました」「ぎふ多胎ネットがなければここまで出来なかった。感謝しております」等の意見があった。

② 相談相手

気軽に多胎育児の相談をする人がいる、と答えた母親は 67 名 (84.8%) であった。いない母親は 12 名 (15.2%) であった。【図 44】 相談相手は夫が最も多く 58 名 (78.4%)、親や親せきが 51 名 (68.9%)、友人・知人が 32 名 (43.2%) であった【図 45】



③ 多胎育児で望むサービス

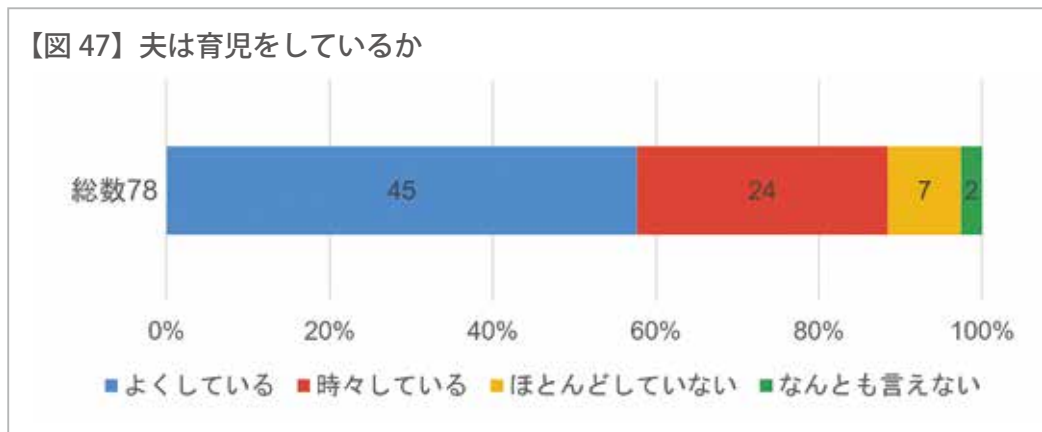
「多胎育児に対する経済的支援」と「多胎育児に対するミルク・おむつなどの現物補助」が最も多くそれぞれ 45 名 (57%) であった。次に「一時預かりなど、保育サービスを多胎家庭が使いやすくしてほしい」と「一時預かりなど保育サービスの無料化」が 40 名 (50.6%) であった。「地域の子育て支援施設での多胎の集いの充実」が 28 名 (35.4%)、「ファミリーサポートの無料化」が 23 名 (29.1%)、「育児ヘルパー派遣事業の無料化」が 22 名 (27.8%)、「ファミリーサポートを多胎家庭が使いやすくしてほしい」21 名 (26.5%)、「医療施設での多胎妊娠出産の情報提供や相談」20 名 (25.3%) であった。【表 46】

【表 46】多胎育児で望むサービス（総数 79・複数回答可）

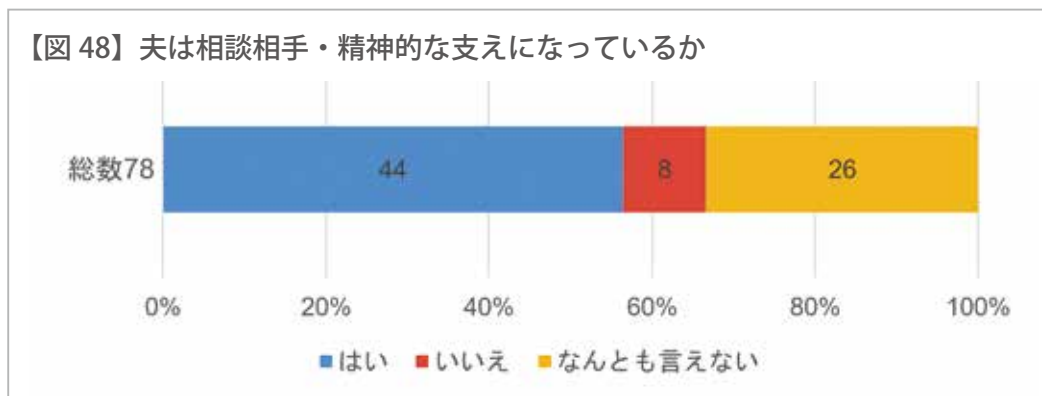
- ・ 多胎育児に対する経済的支援。(45)
- ・ 多胎育児に対するミルク・おむつなどの現物補助。(45)
- ・ 一時預かりなど、保育サービスを多胎家庭が使いやすくしてほしい。(40)
- ・ 一時預かりなど保育サービスの無料化。(40)
- ・ 地域の子育て支援施設での多胎の集いの充実。(28)
- ・ ファミリーサポートの無料化。(23)
- ・ 育児ヘルパー派遣事業の無料化。(22)
- ・ ファミリーサポートを多胎家庭が使いやすくしてほしい。(21)
- ・ 医療施設での多胎妊娠出産の情報提供や相談。(20)
- ・ 行政での多胎妊娠出産の情報提供や相談。(19)
- ・ 育児ヘルパー派遣事業を作してほしい。(15)
- ・ 医療施設での多胎児の健康や子育て相談。(15)
- ・ 妊娠期からのピア（多胎育児経験者）の訪問。(14)
- ・ 行政での多胎の健康や子育て相談。(12)
- ・ 妊娠期からの保健師・助産師の家庭訪問。(10)
- ・ チャイルドシートやベビーカーなど大型の買い物が沢山あるので行政に補助してもらえるとありがたい。(1)
- ・ 多胎は妊婦検診が頻繁で、市からもらったクーポンの枚数が単胎の人と同じ枚数では足りなくなり、自腹で何度も検診にいかなくてはいけなかったため、枚数を増やしてほしい。(1)
- ・ 多胎育児用品専用のフリーマーケット。(1)
- ・ とにかく家に来て欲しい。2人を連れて預けに行くのが低月齢の時は困難。(1)
- ・ 保育施設の入園基準の優先度が低い。三人以上から多子になるが双子だとならないのは違和感がある。(1)
- ・ 育休手当、年金の見なし延長。2人兄弟だと最長4年だが双子は最長2年なので。(1)
- ・ コロナ禍で難しいと思うが、子どもまたは親が体調不良の際に預かってくれる場所がほしい。(1)
- ・ 公共施設の駐車場で、双子ベビーカーを車から出し入れしやすくして欲しい。車の後ろや横から出すため、駐車場を広くとって欲しい。(1)

4. 夫との関係について

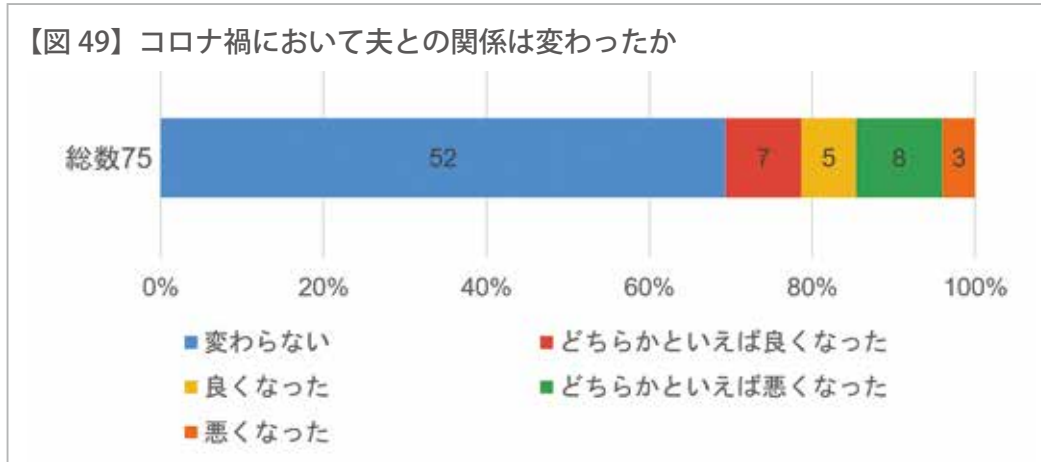
「夫が育児をしているか」という問いには、「よくしている」が最も多く 45 名 (57%) であった。「時々している」は 24 名 (30.4%)、「ほとんどしていない」は 7 名 (8.9%) であった。【図 47】



「夫は相談相手、精神的な支えになっているか」という問いには「はい」が 44 名 (56.4%)、「いいえ」が 8 名 (10.3%)、「なんとも言えない」が 26 名 (33.3%) であった。【図 48】



コロナ禍において夫との関係は「変わらない」が52名(69.3%)、「どちらかといえば良くなった」が7名(9.3%)、「良くなった」が5名(6.7%)、「どちらかといえば悪くなった」が8名(10.7%)、「悪くなった」が3名(4%)であった。【図49】



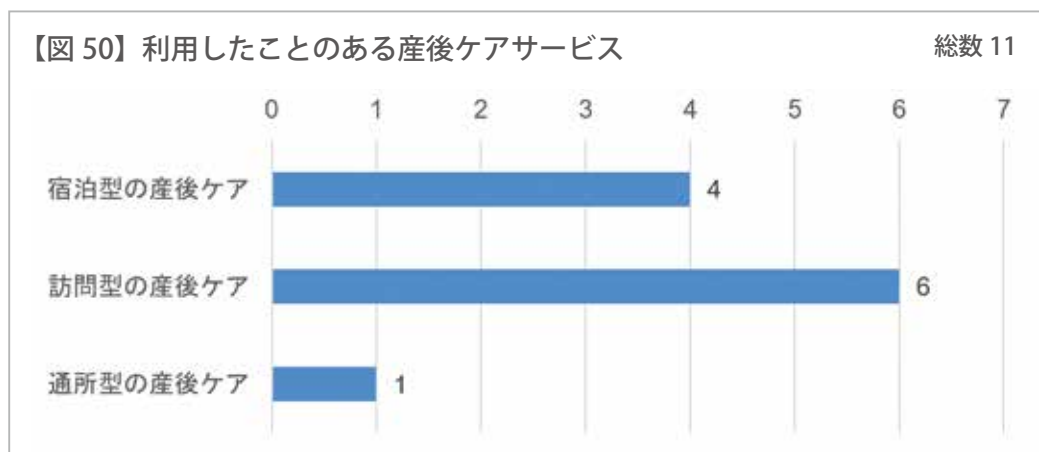
家族との関係では、「夫の仕事のストレスが目に見えて増えたので相談や会話がしづらくなった」「実家と疎遠になった。コロナの価値観の違いも含め」「夫が在宅ワークのおかげで育児に参加しやすくなったが、ずっと家に一緒にいると余計な言葉をぶつけあったりしてしまいストレスがたまる」などの意見があった。



5. 産後ケアについて

1) 利用状況

利用したことがある母親は、「宿泊型の産後ケア」4名、「訪問型の産後ケア」6名「通所型の産後ケア」1名であった。【図 50】



受けて良かったという母親は9名であり「こちらから双子を連れての外出が困難な状況なので訪問して頂けて助かりました」「産後1ヶ月ほどした頃に宿泊型を二泊三日で利用した。ほとんど寝られない日が続いていたので、日中、夜中とも、双子を預かってもらえたのでしっかり寝ることができた。」「助産師の授乳指導を受けられたから。」「自分の体調もよくなかったので、訪問で助産師さんに母乳マッサージなどしてもらい相談もできたため。」という意見があった。1名は「助産師の対応が悪くて途中でキャンセルした」ということであった。【表 51】

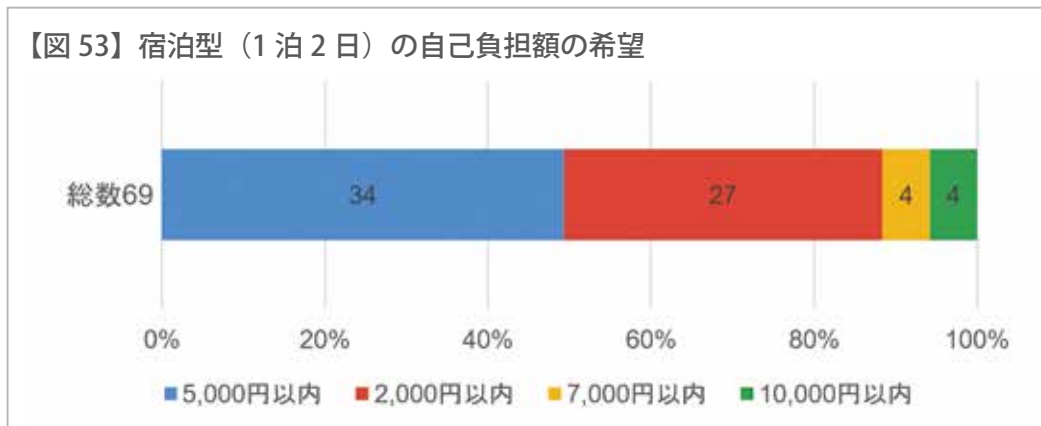
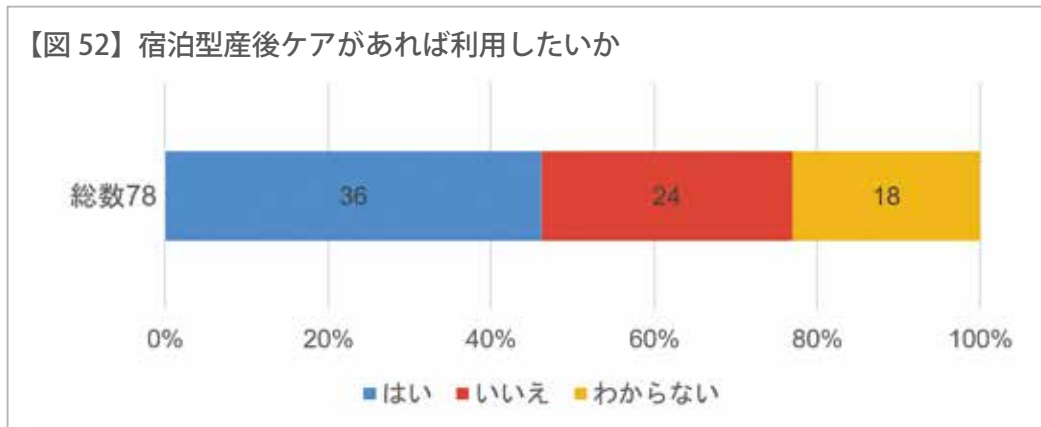
【表 51】 産後ケアを受けた感想 (回答数：10 件)

| 分類 | 記述内容 | 産後ケアの種類 |
|----------------------------|---|---------|
| 助産師の授乳指導を受けることができた。(3) | ・自分の体調もよくなかったので、訪問で助産師さんに母乳マッサージなどしてもらい相談もできたため。 | 訪問型 |
| | ・助産師の授乳指導を受けられたから。 | |
| | ・母乳指導。 | |
| 預かってもらいしっかり休息がとれた。(2) | ・良かったです。産科に宿泊して、3食用意してもらえたのが助かりました。また数時間預かってもらえたので、その間休めました。 | 宿泊型 |
| | ・産後1ヶ月ほどした頃に宿泊型を二泊三日で利用した。ほとんど寝られない日が続いていたので、日中、夜中とも、双子を預かってもらえたのでしっかり寝ることができた。 | 宿泊型 |
| 訪問してもらい助かった。 | ・こちらから双子を連れての外出が困難な状況なので訪問して頂けて助かりました。 | 訪問型 |
| 指導やサービスをゆっくり受けることができて良かった。 | ・出産直後に手術したため入院日数が通常ではならず、延長と言う形で産後ケアを利用したので、産後の子育て指導やサービスをゆっくり受けることができて良かった。 | 入院の延長 |
| 相談することができた。 | ・良かった。相談できて助かった。 | |
| 安かった。 | ・助産師さん頼むより安くてよかった。 | |
| 助産師の対応が悪かった。 | ・助産師の対応が悪くて途中でキャンセルした。 | |

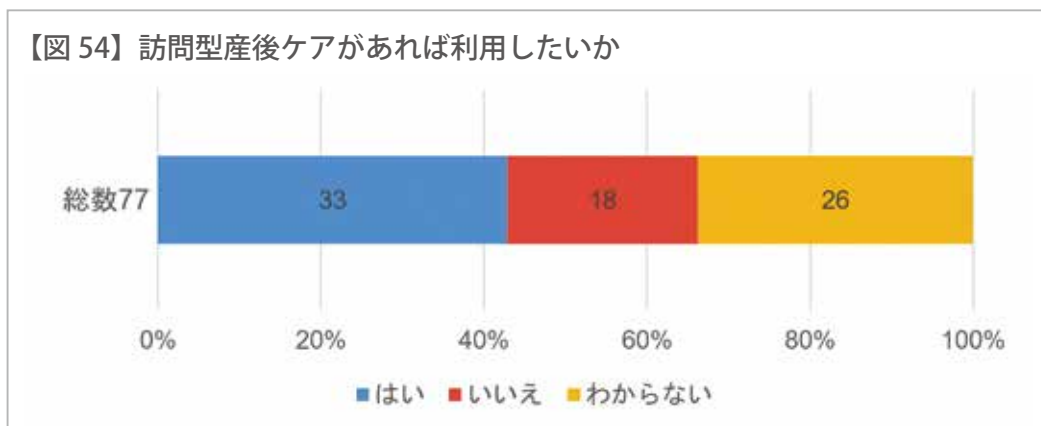
2) 産後ケアの利用の希望と自己負担額

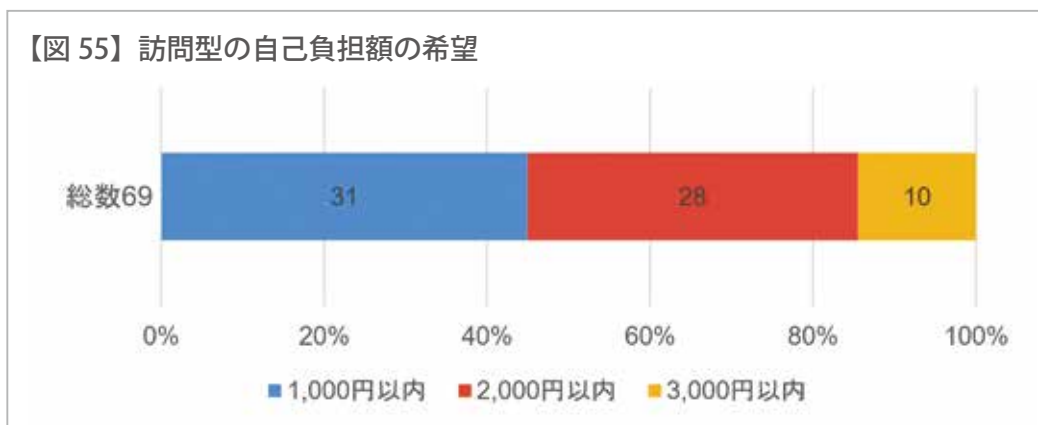
「もしあなたが出産後に宿泊型の『産後ケア』（産科医療機関施設に入院してお世話してもらう）があれば、自己負担があっても利用したいと思いませんか?」という問いに対して、「はい」が36名(46.2%)「いいえ」が24名(30.8%)、「わからない」が18名(23.1%)であった。【図52】

また自己負担額は5000円以内が34名と最も多く次いで2000円以内が27名、7000円以内と10000円以内がそれぞれ4名であった。【図53】

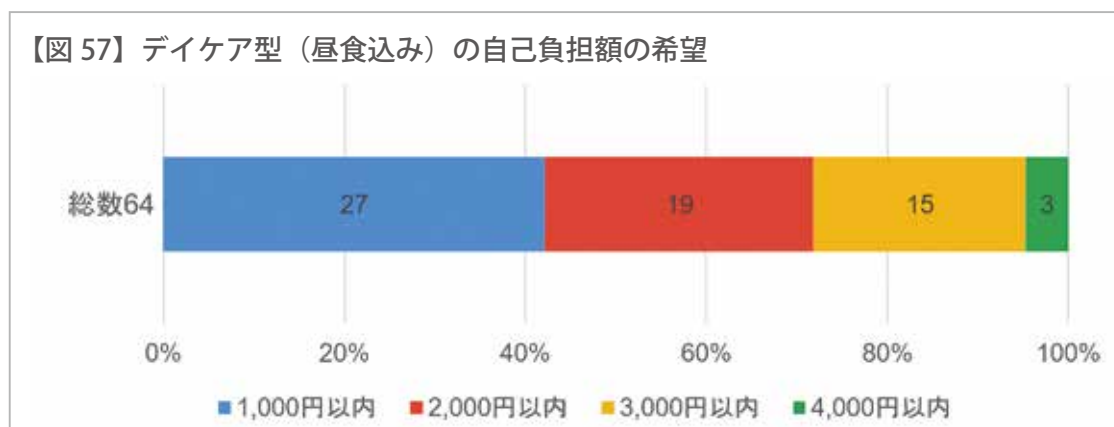
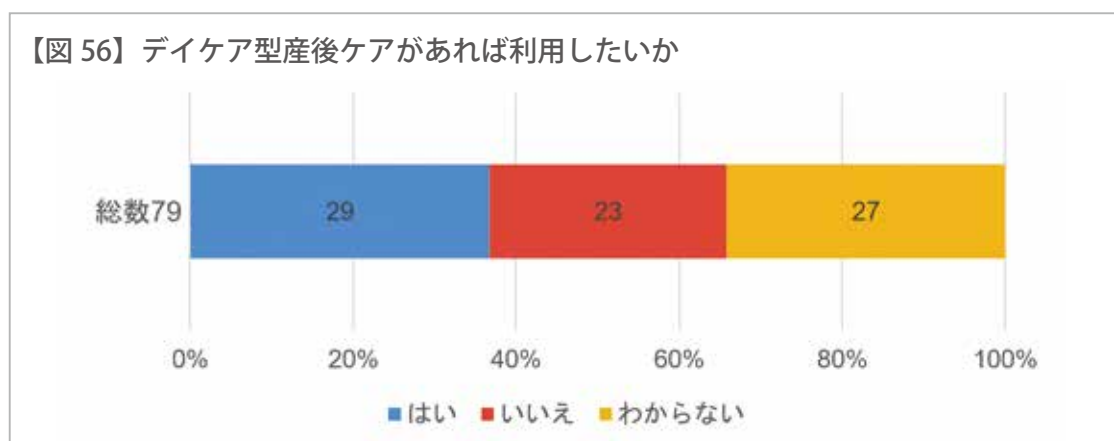


「訪問型の『産後ケア』（助産師や看護師が訪問して授乳などを支援）があれば、自己負担があっても利用したいと思いませんか?」という問いに対して、「はい」が33名(42.9%)「いいえ」が18名(23.4%)、「わからない」が26名(33.8%)であった。【図54】 また自己負担額は1000円以内が31名と最も多く次いで2000円以内が28名、3000円以内が10名であった。【図55】





「デイケア型の「産後ケア」（助産所や産科医療施設に日中滞在して相談や支援を受ける）があれば、自己負担があっても利用したいと思いませんか？」に対して、「はい」が29名（36.7%）「いいえ」が23名（29.1%）、「わからない」が27名（34.2%）であった。【図 56】 また自己負担額は1000円以内が27名と最も多く次いで2000円以内が19名、3000円以内が15名、4000円以内が3名であった。【図 57】



母親への調査結果についての分析と考察

1. 多胎児の母親の体調と育児

多胎児を出産した母親は、自身の体調が妊娠前の元の状態に戻ったと感じるのが遅く、いまだに体調が回復していないという人を含めると、出産後半年から1年以上かかるという人が60%近くあり、体調に関する課題が大きいと考えられる。また現在の体調についても、「心身とも不調」「からだの調子は良いが精神的に不調」「精神的には良いがからだの不調」を合わせると49.4%と半数近くが何らかの不調を訴えていることがわかった。特に身体的に不調という回答が精神的に不調よりも多かった。これらの結果は、「平成22年度幼児健康度調査」の結果で、「心身とも不調」「からだの調子は良いが精神的に不調」「精神的には良いがからだの不調」を合わせて不調を訴えた母親が14%であるのに比べると、はるかに高率で多胎児の母親の心身の不調が示唆された。また多胎児の出産以降、体調の悪さを感じている母親は57%と半数以上であり、多胎児出産と育児が母親の体調に影響することが示唆された。

多胎妊娠は母体への負担が大きく、妊娠期の異常も単胎の妊娠に比べて多いことがわかっている。出産についても出血量が多いことや、出産時に異常に移行することも多く、妊娠出産の負担も産後の体調に影響すると考えられる。さらに、育児期早期(3,4か月まで)の睡眠時間についても4時間以下が47.4%と、出産直後から不眠の状況で生活している様子がうかがえ、体調の回復にはマイナスになっていると思われる。

多胎育児については、育児に自信がもてないことがあると回答した母親は46.8%であり、半数近くが多胎育児に自信がもてないことがあるとしていた。この結果も「平成22年度幼児健康度調査」では23%であり、約2倍であった。また子育てに困難を感じる母親は、多胎児では70.9%であり、「平成22年度幼児健康度調査」では23%と3倍以上であった。これらのことから多胎児の不安や困難感は相当高いと考えられる。さらにこどもを虐待しているのではと思う母親は、24.1%と「平成22年度幼児健康度調査」の結果にくらべ2倍以上高かった。

虐待しているのではないかという思いと関連する要因としては、育児の困難感と体調の悪さがあげられた。育児に困難を感じる母親のほうが有意に「虐待しているかもしれない」不安の割合が多かった【表58】。また現在の体調が心身とも体調がよい、とする母とそうでない母親には「虐待しているかもしれないと思う」について有意に体調がよいとする母親の虐待の不安が少なかった。【表59】

【表58】多胎育児の困難感と虐待しているかもしれない不安感との関連

| | 虐待している かもしれない | なんとも いいない | いいえ | 計 |
|---------------|------------------|--------------|-----|----|
| 多胎育児に 困難あり | 18 | 8 | 30 | 56 |
| なし | 1 | 3 | 19 | 23 |
| 計 | 19 | 11 | 49 | 79 |

p > 0.001 p = 0.00048

【表59】体調不良と虐待しているかもしれない不安感との関連

| | 虐待している かもしれない | なんとも いいない | いいえ | 計 |
|---------------------|------------------|--------------|-----|----|
| 体調不良 ではない | 5 | 8 | 26 | 39 |
| 心身ともにまたは どちらかが不良 | 14 | 3 | 22 | 39 |
| 計 | 19 | 11 | 48 | 78 |

p > 0.05 p = 0.0322

2. 多胎児の年齢別にみた育児の課題

多胎児の年齢別にみた育児の課題について、「子どもを虐待しているかもしれないと思う」ことがあるかについては、割合として最も多かったのが2歳児の母親であり、1歳児、3歳児、0歳児の順であった。多胎育児の困難感については、「困難に感じることがある」母親は、1歳児の母親の割合が多く、次に2歳児、3歳児、0歳児の順であった。育児の自信については「自信がもてないことがある」とした割合が最も多かったのは、1歳児の母親であった。次に2歳児、3歳児、0歳児の母親の順であった。多胎育児において課題になる「虐待しているかもしれないという不安」や「困難感」「自信のなさ」については、1、2歳児の母親に認められることが多く、1、2歳児になると子どもの動きも活発になり、多胎育児の負担が蓄積されているのではないかと考えられた。

母親の体調と児の年齢については、0歳児では、心身ともに体調が良いという母親は、13名(43.3%)であり、体調が良くない母親は17名(56.6%)であった。体調がよくない母親が最も多い割合であったのは、1歳児の母親(83.3%)であった。育児の困難感とも関係するが、母親の体調の悪さも児が1、2歳代のほうが0歳児より多いことがわかった。【表60～63】

多胎児の母親に関しては、出産後の体調不良も長引くこともあり、妊娠期から産後3歳ごろまでの支援が必要であることが示唆された。

【表60】
年齢別にみた虐待しているかもしれない不安

| | 虐待している かもしれない | なんともいえない +いいえ | 計 |
|----|------------------|------------------|----|
| 0歳 | 4 (13%) | 26 (87%) | 30 |
| 1歳 | 5 (27.8%) | 13 (72.2%) | 18 |
| 2歳 | 7 (33.3%) | 14 (66.7%) | 21 |
| 3歳 | 3 (30%) | 7 (70%) | 10 |
| 計 | 19 | 60 | 79 |

【表61】
年齢別 多胎育児の困難感

| | 困難感あり | なし | 計 |
|----|------------|-----------|----|
| 0歳 | 18 (60%) | 12 (40%) | 30 |
| 1歳 | 15 (83.3%) | 3 (16.7%) | 18 |
| 2歳 | 16 (76.2%) | 5 (28.8%) | 21 |
| 3歳 | 7 (70%) | 3 (30%) | 10 |
| 計 | 56 | 23 | 79 |

【表62】
年齢別にみた育児の自信

| | 育児に 自信なし | あり | 計 |
|----|-------------|------------|----|
| 0歳 | 8 (26.7%) | 22 (73.3%) | 30 |
| 1歳 | 13 (72.2%) | 5 (27.8%) | 18 |
| 2歳 | 11 (52.4%) | 10 (47.6%) | 21 |
| 3歳 | 5 (50%) | 5 (50%) | 10 |
| 計 | 37 | 42 | 79 |

【表63】
年齢別にみた体調

| | 心身とも 体調よい | そうではない | 計 |
|----|--------------|------------|----|
| 0歳 | 13 (43.3%) | 17 (56.6%) | 30 |
| 1歳 | 3 (16.7%) | 15 (83.3%) | 18 |
| 2歳 | 5 (25%) | 15 (75%) | 20 |
| 3歳 | 3 (30%) | 7 (70%) | 10 |
| 計 | 24 | 54 | 78 |

3. 多胎育児の困難感

多胎育児を困難に感じる母親は、そうでない母親に比べて「虐待しているかもしれない不安」をもっていることがわかった。「相談相手の有無」や「育児の自信について」については有意差がなかった。また多胎育児に困難を感じる母親はそうでない母親に比べて有意に育児に自信がもてないという割合が高いことがわかった。【表 64】

多胎育児の困難感は、【表 30】に示すように同じ年齢や月齢の乳幼児を同時に育てることについて、外出時の困難感、育児の方法や子どもとの関わりなど育児生活全般にわたって困難が生じていることがわかった。これらは多胎育児特有の悩みであり、特に最も多かった外出困難は、多胎児の母親の孤立感を高めることになると考えられる。また多胎児が同時に泣くことやぐずることは母親にとって精神的な負担になり、「泣くことに耐えられない」という母親の心理状態につながっていると思われる。同様に多胎児の喧嘩も母親のイライラが増す原因となり、精神的な不調につながると考えられる。多胎児の育児では子どもの世話を倍以上の手がかかるので、毎日の子どもの世話だけで疲労感を感じ、疲労が蓄積されていくと体調の悪さに関係してくると考えられる。

また多胎児一人一人に十分関わってあげられない、と感じている母親も多く、このような思いは母親としての不全感や自信のなさにつながるのではないかと考えられた。自分の時間を確保できない、という訴えも多く、ゆとりのない育児生活は母親の心身の健康に関わると考えられる。

多胎児の母親では、自分の時間をもてると答えた母親は32.1%であり、もてないと答えた母親が26.9%であった。これは「平成 22 年度幼児健康調査」の結果では、自分の時間をもっている母親 53%、もてないが 22%であったので、多胎児の母親は時間に追われる生活をしていることが窺われる。さらに子どもとゆっくり過ごせる時間があるかという問いについても、平成 22 年度調査では、76%がある、と答えているのに対し、多胎児の母親では 62%であり、「ゆっくりと子供と過ごせる時間がある」と感じていない、もしくは「何ともいえない」と感じている母親が、40%近くいることは考慮すべきことである。これらの母親の生活状況は、母親の精神的な健康に大きく影響を与えていると考える。

【表 64】 育児の自信と困難感との関連

| | 困難感あり | なし | 計 |
|---------|-------|----|----|
| 育児に自信なし | 32 | 5 | 37 |
| あり | 24 | 18 | 42 |
| 計 | 56 | 23 | 79 |

$p > 0.01$ $p = 0.0058$

4. 母親の相談相手、父親との関係

父親は育児をしているかという問いでは、よくしているが57%であり、これは「平成22年度幼児健康調査」の42%より高値であり、多胎児では一般の家庭に比べ父親が育児をよくしているということがわかった。しかし、父親との関係において、母親の精神的な支えになっているか、という問いに対して「はい」は、56%であり「平成22年度幼児健康調査」の70.4%に比べると低値であった。多胎家庭では父親も育児をせざるを得ない状況であると想像されるが、母親も時間に追われる生活をしており夫婦間のコミュニケーションが不十分で、満足度が低いのではないだろうか。

また核家族であるか拡大家族であるかという家族形態と多胎育児の困難感は有意に関係していた【表65】。核家族であれば、母親や父親にかかる負担、特に母親への負担は大きくなることが予想される。祖父母同居であれば、ちょっとした手伝いも頼めることも多いと考えられるので当然母親への負担は軽減になっていると思われる。やはり多胎育児では、子どもたちの世話で手が足りない、ということが明らかな二一ズであると考えられる。

【表 65】 家族形態からみた育児困難感

| | 困難感あり | なし | 計 |
|------|-------|----|----|
| 核家族 | 49 | 15 | 64 |
| 拡大家族 | 7 | 8 | 15 |
| 計 | 56 | 23 | 79 |

$P > 0.05$ $p = 0.0217$

5. 産後ケアに関する課題

産後ケアを実際に利用した母親は、のべ11名と少なかったが、受けて良かったという母親が9名（82%）であり、今後の利用を推進することが求められる。産後ケア（宿泊型、デーサービス型、訪問型）を利用したかったかという質問には、それぞれ約4割の母親が「利用したい」とこたえていたが一方で、わからないという母親も3割ほどあり、「産後ケア」に関する広報や周知を図っていく必要がある。しかし、「産後ケア」に関わる料金については、宿泊型であれば約9割の母親が5千円以下であれば利用したい、と答えており実際の利用料金は自治体により異なるが、利用者負担額については課題があると考えられる。

また産後ケアは、市町村に申請して認められる制度なので、産前産後に行政の保健師が多胎家庭の状況をふまえ利用に繋げる役割をとる必要がある。多胎家庭は産後、父母自らが情報収集をしたり、申請に向くのは現実的に難しく保健師のサポートが不可欠であると考えられる。この点からも妊娠期からの多胎家庭への支援は必要である。

6. コロナ禍における多胎育児の課題

コロナ禍において、約半数の母親が多胎育児がより大変になったと答えている。普段から外出が困難な多胎家庭であるが、コロナ禍によりさらに外出が難しくなり、子ども同士遊ばせる場所もなく、母親への負担はより大きくなっているのではないかと推察される。またコロナ禍で心身の不調を感じる母親は約45%であり、長引くコロナの影響により多胎家庭の置かれた育児環境はより悪化しているのではないだろうか。

またコロナ禍で出産を体験した母親や家族は、専門職から十分な指導や支援を受けられず、育児で困ったという訴えがあった。コロナ禍では対面での指導が制限され、今まで医療施設や行政で行われてきた産前教室や授乳指導、沐浴指導なども中止になっていたり、オンラインなどで行われたりと、直接指導を受ける機会が減っている。これらの指導は産後の育児にスムーズに取り組めるために意義があったのだが、多胎家庭では、産後すぐに二人三人同時の育児、という難しい状況に陥り、育児の困難感がより増強していることが予想される。コロナ禍においては、行政の新生児訪問なども敬遠されがちであるも考えられるが、早期の訪問支援の必要性は高まっているので、感染予防対策を取ったうえでの保健師の訪問支援が望まれるところである。

コロナ禍において求められる支援については、【表 25】にあげられるように、「こどもが遊べる施設や親子の交流の場があると良い」「相談や繋がりができる支援」「外出できないことによる課題」などがあり、コロナ禍において、感染予防対策をした上で子ども同士や親子の交流の場を設定する工夫が必要である。

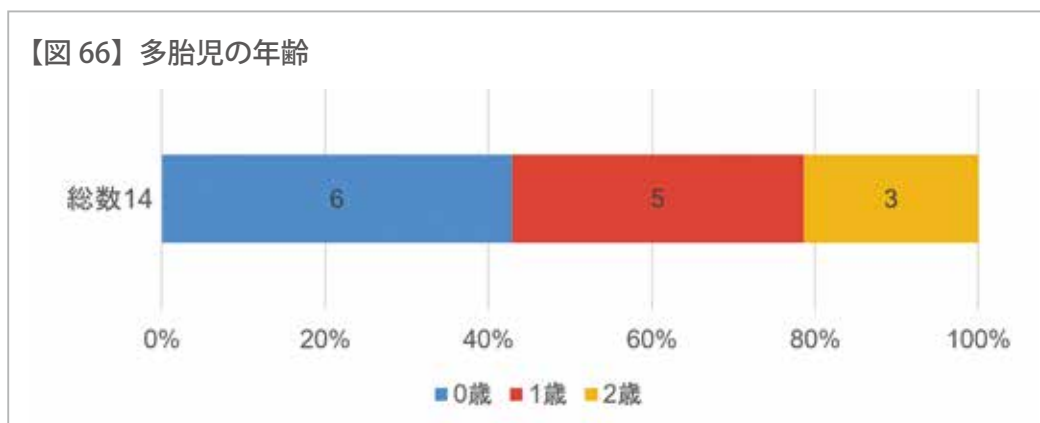
ファミリーサポートについては「コロナのため利用を辞めた」という意見があり、新型コロナウイルス感染症の不安はぬぐい切れず、ますます多胎児の母親は家に閉じこもりがちになっていると思われる。またファミリーサポート自体、制度設計において多胎児が利用しやすいようにはできていないと考えられる意見もあり、ファミリーサポート事業について自治体での多胎家庭利用についての検討が必要であると考えられる。



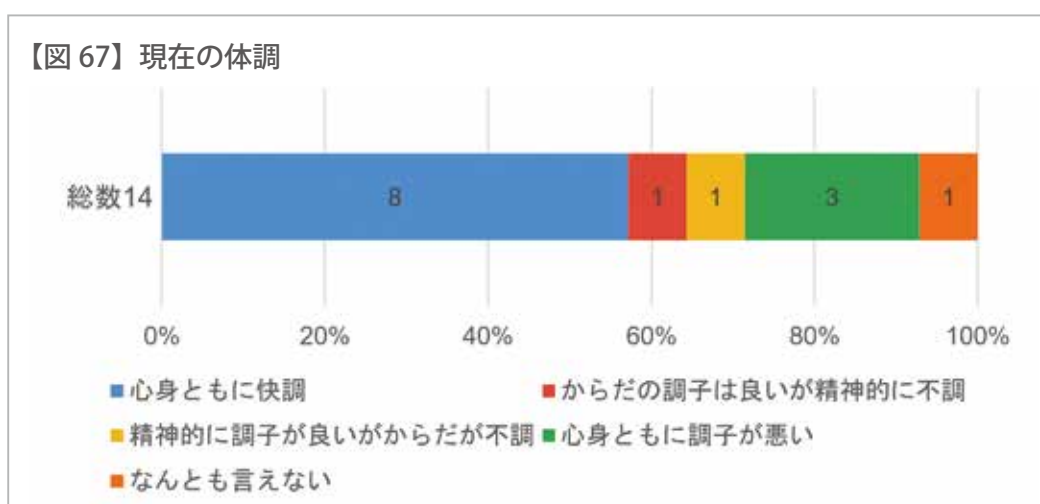
父親への 調査結果と考察

1. 父親の体調と多胎育児

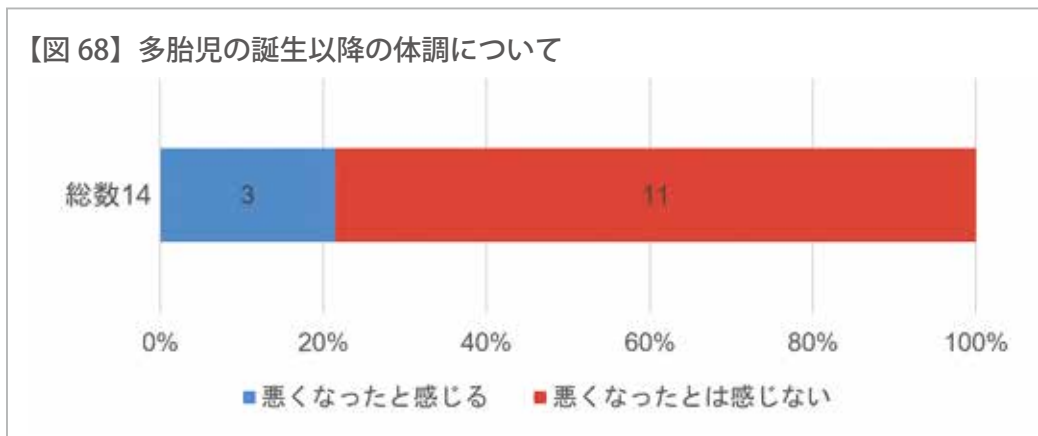
父親の回答は14件であり、多胎児の年齢は0歳6名(42.9%)、1歳5名(35.7%)、2歳3名(21.4%)であった。【図66】



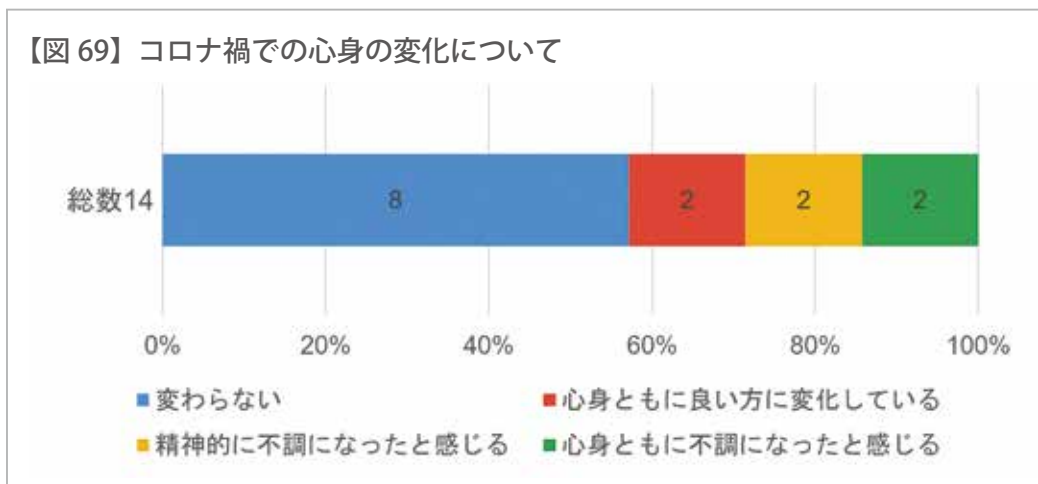
父親の現在の体調については、「心身ともに快調」8名(57.1%)、「からだの調子は良いが精神的に不調」1名(7.1%)「精神的に調子が良いがからだの不調」1名(7.1%)「心身ともに調子が悪い」3名(21.4%)「なんとも言えない」1名(7.1%)であった。【図67】



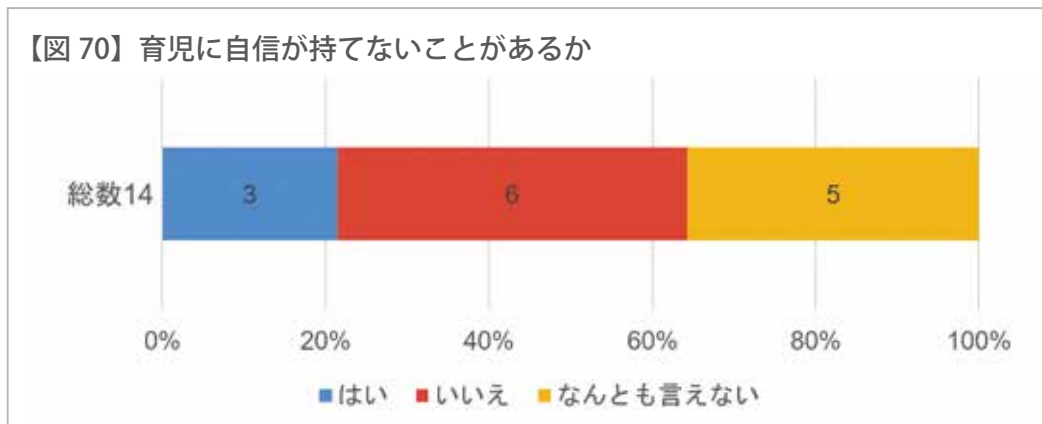
「多胎児の誕生以降体調が悪くなったと感じるか」という質問については「悪くなったと感じる」が3名(21.4%)、「悪くなったとは感じない」が11名(78.6%)であった。「悪くなったと感じる」と答えた父親で体調が回復したと思えたのは、誕生後半年程度、1年程度、まだ回復していないがそれぞれ1名であった。【図 68】



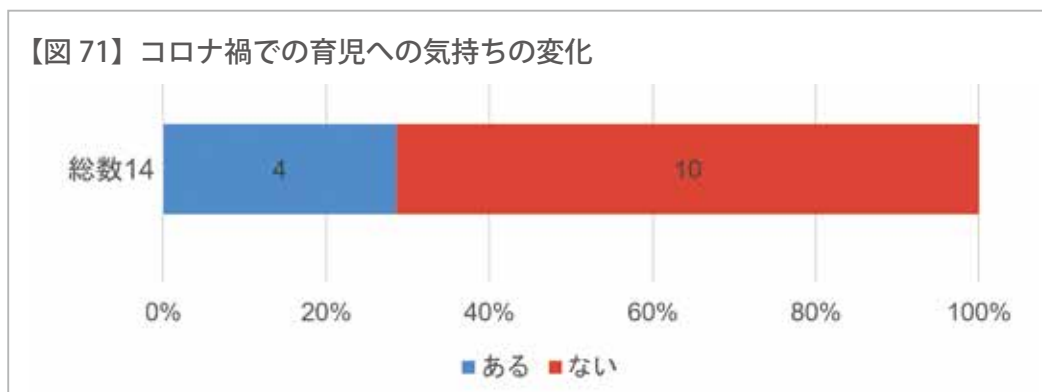
「コロナ禍において心身の調子に変化があったか」という問いに対しては、「変わらない」が最も多かった。「心身ともに不調になった」という回答は2名であった。【図 69】



「育児に自信が持てないことがあるか」という問いに対しては「はい」が3名で「いいえ」は6名、「なんとも言えない」が5名であった。【図 70】



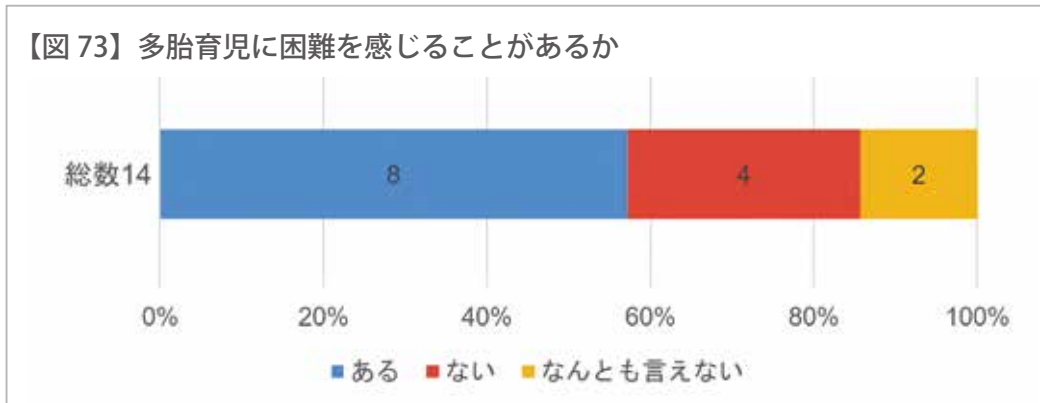
「コロナ禍において育児への気持ちに変化があった」と答えた人は4名であった。【図 71】 その内容は以下の通りである。【表 72】



【表 72】 コロナ禍における育児への気持ちの変化

- 感染リスクを感じながらの生活は精神的につらい。
- 公務員のためテレワークや時短勤務は今のところ無いが、外出や友人に会うなど気分転換の出来ない妻に代わり、土日は率先して家事育児を行うようにしている。
- コロナに対して注意深くなった。
- いろんな所へ連れて行ってあげられなくて残念。

「多胎育児に困難を感じることもあるか」という問いに対しては「はい」と答えた父親は8名であった。【図73】 困難感の内容は以下の通りである。【表74】



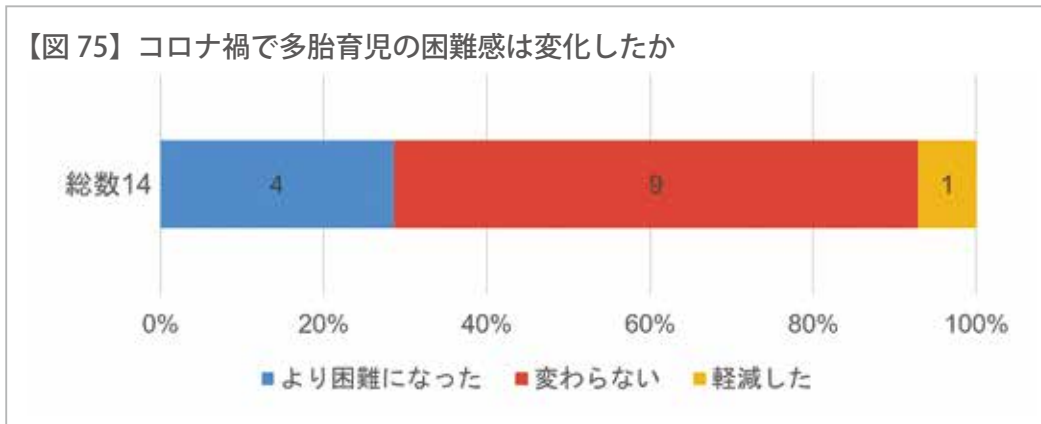
【表74】 多胎育児で困難に感じていること

- 2人同時に泣く。なかなか寝ない。目が離せない。
- 同時に2人相手することができない。発達がゆっくりで大変。出かけることもままならない。
- とにかく手が足りない。イヤイヤがピークになると互いに噛みつき合うため、家事も進まない。
- 夫婦で子育て出来る時間は良いが、1人の時は大変。一緒に買い物行くと大変。
- 疲れる。エライ・しんどい。
- お金が足りない、育児にかかる手間が多い。一人の育児よりいい加減部分が増えてしまっている。
- 自分は仕事があるため妻に育児を頼むことになり、申し訳ない。
- 病気になったとき、食事、1人で子供たちと外出するとき。



またコロナ禍において多胎育児の困難感が「より困難になった」と答えた父親は4名であった。

【図 75】 より困難になった理由は以下の通りである。【表 76】



【表 76】 コロナ禍での多胎育児がより困難になった理由（4件・複数回答可）

- 県外への外出のハードルが高く、手伝いに来てもらいにくい。(3)
- 子どもたちを連れて外出しにくい。(3)
- 気軽に友達（知り合い等）と会いにくい。(3)
- 子どもたちの交流の場に行けないことで、子どもたちの発達に不安を感じる。(3)
- 県外への外出のハードルが高く、実家に帰りにくい。(2)
- 子どもたちが外出できないことで、夜寝てくれないように感じる。(1)
- 病児保育に預けにくくなった。(1)



2. 考察

父親への調査から、約 2 割の父親が、多胎児の誕生以降体調が悪くなったと答えていた。また現在の体調は心身とももしくはどちらかがよくない、という父親は 5 名、育児に自信がもてないという父親は 3 名と回答数は少ないが、この結果は注目すべきことであると考えられる。今回の調査対象の多胎家庭は核家族で育児をしている家族が 8 割以上であり、多胎児の他にも子供がいる家族もあり、母親のみならず父親にも負担が大きく、体調がよくないと訴える父親もいる、ということが明らかになった。父親の訴えについても「手が足りない」「疲れる」「二人同時に泣く」「二人同時に相手ができない」など多胎児の育児特有の大変さがうかがえた。少数ではあっても父が不調を訴えている家族は、母の健康状態も気になる。両親とも多胎育児の負担のため体調の悪化を訴えている家族があってもおかしくはない。父親も含めた家族支援が望まれるところである。

また半数以上の父親が多胎育児の相談者がいない、と答えていた。妻を除いては相談できる人がいない、ということであると推察される。妊娠期から多胎育児の相談を希望している父親もいることから、今後は父親に対しても多胎の父親の立場でサポートができる体制も必要なのではないか。

父親も母親と同様、多胎育児に対する経済的な支援やミルク・おむつなどの現物支給、多胎児の一時預かりサービスの充実を希望していた。それぞれの家族のニーズに応じた支援が必要であると考えられる。

コロナ禍において、外出しにくくなっていたり、県外から手伝いを呼べなかったり、多胎家庭がますます孤立してしまう可能性がある。コロナ禍において多胎育児の困難感がより増したという父親は 3 割近くあり、乳児期から 3 歳くらいまでの幼児期の支援については、多胎家庭において両親ともに使いやすいサービスの検討が必要である。



政策提言

この章では、今回の結果をもとに多胎家庭に必要な支援について10の提言をしたい。
これは、岐阜県内での多胎支援を想定しているが、ぜひ全国にも広がってほしいものであるため、全国の自治体の参考にもなれば幸いである。

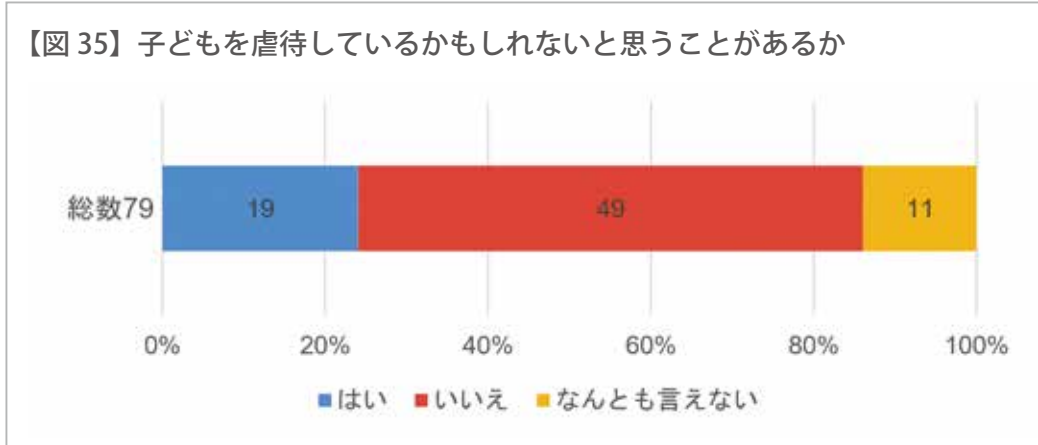
1. ピアサポートの力を活かした多胎家庭支援の事業化を

岐阜県では県や市町村とNPO法人ぎふ多胎ネットとが連携した事業として以下の図に挙げたような多胎支援事業を行なっているが、この効果が顕著に見られる。従って、この支援が全国に広がることで、多胎家庭の虐待がかなり防止できると思われる。



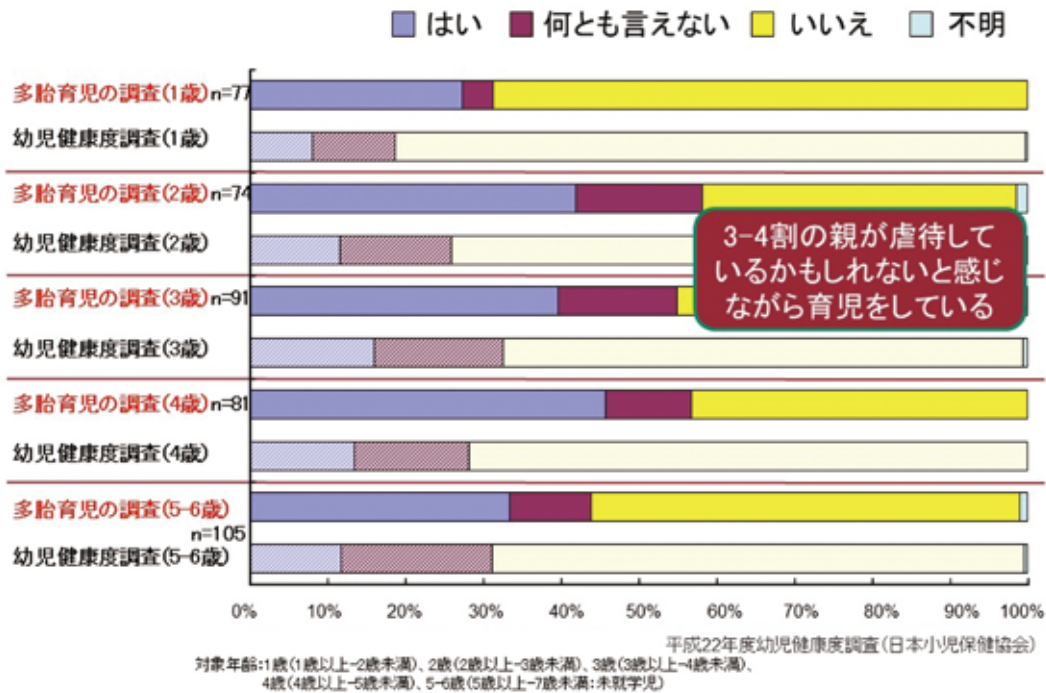
まず、今回の調査で注目すべきはp25の【図35】の母親の虐待感情である。「子どもを虐待しているかもしれないと思うことはありますか」という質問に対して今回の調査では、下の図のように62%の人が「いいえ」と答えている。これは、下にある2011年に実施された「多胎育児に関する全国調査」（元石川県立看護大学大木秀一教授）で、2～3歳の多胎児の養育者の40%ほどが「いいえ」と答えているのに比べて非常に多い。また、今回の調査で「はい」と答えている人が24.1%であるのに対して、大木教授の全国調査では、2～4歳の多胎児の養育者の40%以上が「はい」と答えている。

つまり、今回の調査の母親の虐待感情は非常に低いことを意味している。同じく元石川県立看護大学大木秀一教授が多胎家庭の虐待死発生率は単胎家庭の2.5～4倍と示されたことから考えると、これは岐阜県の多胎支援が極めて大きな虐待防止効果を挙げていることを示している。

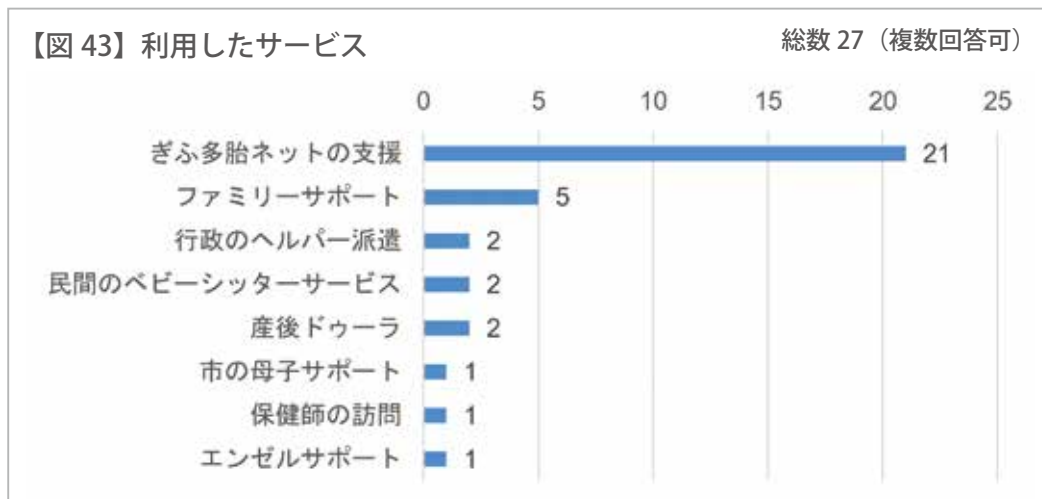


2011 年度「多胎育児に関する全国調査」

Q 子どもを虐待しているのではないかと感じることはありませんか？



今回の調査対象は、ぎふ多胎ネットに登録し何らかの支援を受けた経験のある人であること、また p28 の【図 43】で、利用したことがあるサービスに 77.8%の人が「ぎふ多胎ネットの支援」を挙げていることに注目してほしい。



以下の図にもあるようにピアサポートの効果を国も認め、予算化している。

多胎妊産婦への支援の強化について

- 多胎妊産婦への支援について、ピアサポート事業や、育児サポーター等派遣事業に加えて、多胎児を妊娠した場合に、単胎に対して追加で生じる妊婦健康診査の費用の補助や、育児サポーターを更に活用しやすくすることにより、誰もが子育てをしやすい環境を整える。

■実施主体：市区町村 ■補助率（案）：国1/2、市区町村1/2

■事業内容

①**多胎妊産婦サポーター等事業（拡充）**：補助単価案：月額424,500円（10万人以上30万人未満の自治体）など
多胎妊産婦等は、育児等に対する孤立感や負担感が大きいため、様々な支援が必要とされる中、新型コロナウイルス感染症の影響により、心身ともに負担が増すことが考えられることから、市町村の規模に応じた拡充を行い、多胎家庭の負担軽減を図る。

②**多胎妊娠の妊婦健康診査支援事業（新規）**：補助単価案：1回5,000円（5回を限度）
多胎児を妊娠した方に対して、単胎よりも多く生じる妊婦健康診査の費用を補助する。

既存事業

<多胎ピアサポート事業>

- 多胎児の育児経験者家族との交流会等や、多胎育児経験者による相談支援事業を実施。

<多胎妊産婦サポーター等事業>

- 多胎妊婦や多胎家庭のもとへ育児サポーターを派遣し、外出時の補助や、日常の育児に関する介助を行う。



新規・拡充事業

<多胎妊産婦サポーター等事業の拡充>

- 市区町村の規模に応じて、サポーターの派遣に要する事業の拡充を行うことで、市町村で実施しやすい環境を整えることにより、多胎家庭の負担軽減を図る。

<多胎妊娠の妊婦健康診査支援事業の創設>

- 多胎児を妊娠した方に対して、単胎よりも多く生じる妊婦健康診査の費用を補助する。



岐阜県では、これに先んじて15年ほど前から、ぎふ多胎ネットと県や市町村行政、医療機関などが連携して妊娠期から切れ目なく多胎支援を推進してきた。多胎育児経験者がその経験を活かし、P47の図のように当事者のニーズに合った当事者性の高い支援メニューを提供し、多胎家庭の孤立を防いできた。この効果が明らかになったわけである。

しかし、現在のところ、この切れ目のない支援が市町村で事業化され「いつでも相談できる育児環境」が保障される見通しがあるのは42市町村のうち大垣市・多治見市・岐阜市・美濃加茂市・可児市・関市・北方町・中津川市・恵那市・瑞浪市・土岐市のみであり、他の市町村では企業助成金の終了と共に支援が途切れてしまう。

産前の支援は岐阜県の事業として行政・医療・子育て支援者（ピアサポーター）という地域包括支援のメンバーが連携した多胎支援のシステムが出来上がっている。産後もこれを上手に活かし、「市町村の事業として保健師の赤ちゃん訪問のピアサポーターの同行支援、ピアサポーターによる健診サポートや家庭訪問など育児期の多胎家庭支援を事業化すること」を提案したい。

国からも多胎妊産婦支援事業が予算化された今、この予算を利用し、どの地域の住民であっても多胎家庭支援が受けられることが望まれる。特に健診サポートは、単なる健診の介助ではなく、多胎育児経験者の話が聞ける貴重な機会である。ここで知り合ったピアサポーターに、その後も相談するケースが多いため、相談者の獲得という面も兼ね備えた事業である。

健診サポートを事業化することで、岐阜県内のどの市町村も多胎家庭に「いつでも相談できる育児環境」を保障し、多胎家庭の虐待防止対策を図ることに、ぜひ取り組んでいただきたい。

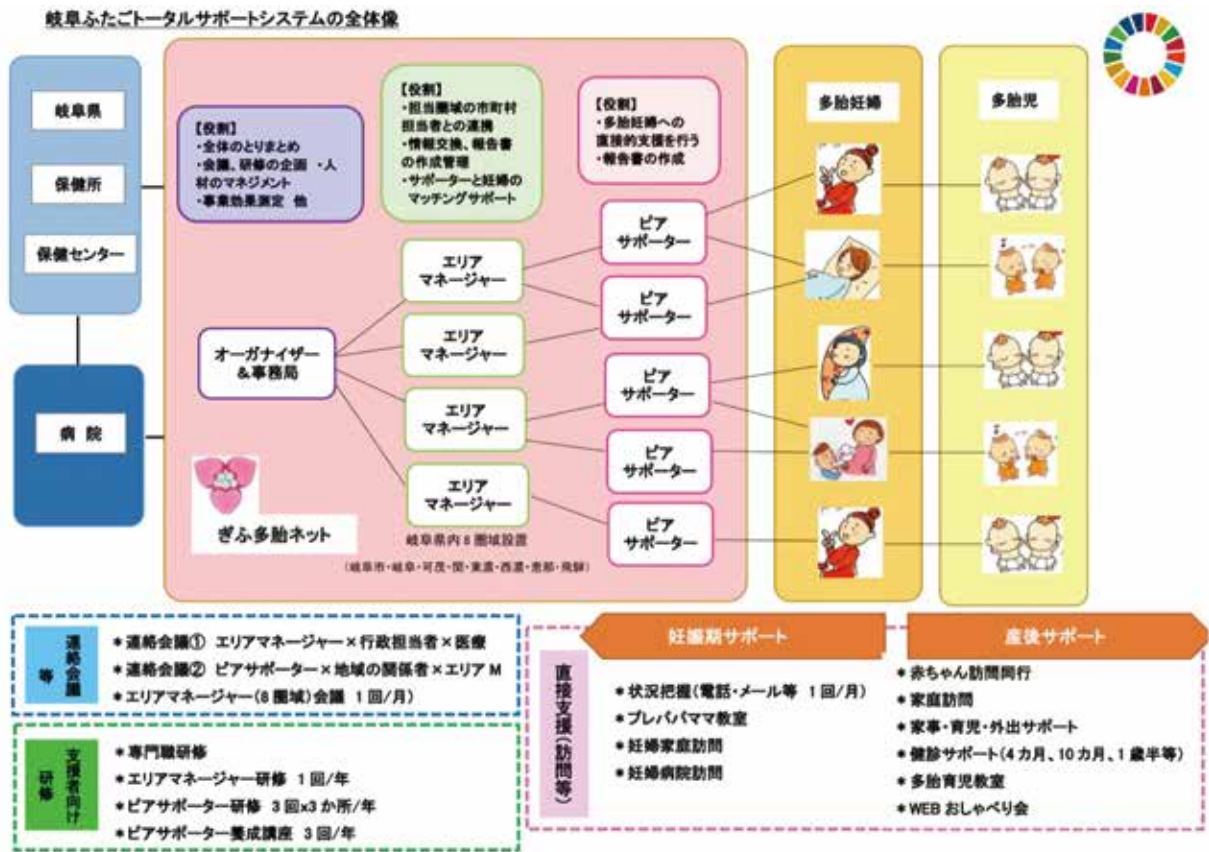


2. 妊娠期からの支援の継続と更なる充実を

また、岐阜県では県の事業として2020年度から以下の図のようにマイサポーター制度を導入し、母子健康手帳を受け取った時点から多胎妊婦1人にピアサポーター1人が付き、きめ細かに伴走する支援の形となった。この伴走の形を産後も継続するよう、ぎふ多胎ネットは企業の助成金で産後の支援を提供してきた。(この支援のスタイルは米国オレゴン州のヘルシースタート等を参考にした。)このことが「安心・安全な出産と、いつでも相談できる育児環境」を保障し、母親の虐待感情を低下させたと思われる。

先に挙げた国の「多胎妊産婦支援事業」は母子保健事業のため市町村にしか予算が下りない。

しかし、人口の少ない市町村では多胎支援を事業化することが難しく、なかなか支援が進まなかった。岐阜県では「どの市町村の住民であっても県民全体が公平に支援を受けられるよう」支援のスタートである妊娠期の支援を県の事業とし、支援の枠組みを作ることで、その後にバトンを渡された市町村がスムーズに支援を継続できるようにした。これは英断である。このことが認められ、岐阜県は令和3年度「健康寿命をのばそう！アワード」で厚生労働大臣賞を受賞している。



今後も広域支援の役割を果たし、更なる支援の充実を望みたい。

また、全国の都道府県・市町村でも、岐阜県が多胎支援の方法～虐待防止効果の高い妊娠期からの切れ目のない支援～をぜひ取り入れてほしい。この支援が広がれば、多胎家庭の虐待はゼロにできると考える。

3. 多胎産婦の産後ケア利用の助成と保健師からの推奨を

今回の調査では産後の母体の回復が不十分な中、過酷な育児に取り組んでいる多胎児の母親の姿が明らかになった。一般にコロナ禍で産後うつが増加が懸念されているが、この調査でも体調不良を訴える母親は多かった。

また、コロナ禍で妊娠期の両親学級も中止になり、病院スタッフの不足により退院指導もされなくなり、授乳や沐浴など基本的な子育ての方法がわからないまま育児をすることになったため、育児困難に陥っている姿も明らかになった。

こうした状況を打開する方法として産後ケアの積極的な利用を推奨すること、利用しやすいよう利用料金の助成をすることが望まれる。

産後ケアという制度があること、自分がそれを受けられることは一般の母親にはあまり知られていない。産婦が育児困難に陥る前に、保健師が産後の早い時期に赤ちゃん訪問を実施し、母体の状態や育児の状況をアセスメントして、産後ケアを積極的に勧めてほしい。

例えば可見市では、デイサービスの産後ケア施設が500円で利用できるため、何度もここに通い、元気を取り戻した例があった。この母親は子育ての方法もここで学び、ここで知り合った他の母親と一緒に併設されている子育て広場も利用し、地域での子育て仲間も獲得していった。

健康な母体でなければ、健全な子育ては叶わない。また子育ての情報のない中で、難易度の高い多胎育児をすることは非常に困難である。

傷んだ母体を休ませながら、低出生体重で産まれた2人以上の乳児にうまく授乳する方法を学ぶ産後ケアを受けることで、多胎育児のリズムを習得し「すごく楽になった」「何とかできるようになった」「体重差があったので飲む量も違い、どうしたら良いかわからなかったので授乳プランを作ってもらえて助かった」という声を複数聞いている。産後ケアの効果は大きい。

多胎育児は単胎児の育児とは違う。情報も少なく身近に経験者もいない。こうした特殊な育児にはインターン期間が必要だと思われるため、産後ケアを積極的に利用できるようにしたいものである。

4. 産後の早期訪問を

コロナ禍で、産前に切迫早産になっても家族の面会も受けられず、夫婦で不安を乗り越える経験もできないまま出産となるケースも見受けられる。また、出産後も赤ちゃんたちがNICUに入院した場合、面会の回数や人数の制限で思うように会えないままとなるため、愛着形成は困難となり、夫婦の情報共有も困難となる。

先に述べたように母体の回復も思わしくなく、育児困難に陥りやすい。

こうした状況をよく理解し手遅れにならないよう、保健師にはできる限り多胎育児がスタートしてすぐの訪問を実施してほしい。

また、訪問の際には母体の状態、睡眠、授乳、沐浴、1日のタイムスケジュール、2人の違いに対する母親の感情、何に困難を感じているかなど、多胎育児のポイントになる事柄を具体的に聞き取り、不安感を取り除く指導をお願いしたい。

5. 産褥期の多胎育児をサポートする支援メニューの事業化を

コロナ禍で県を跨いで移動が困難になり、遠方から親族に手伝いに来てもらえなくなったことで、母親の育児負担は増大している。また、実母の死亡など親族の手伝いが元々期待できない家族もいる。特に産褥期は母親の体調不良もあり、育児を手伝ってくれる「手」が必要な時がある。大垣市のエンゼルサポートや多治見市・岐阜市のファミリーサポートなどのように、そうした時に無料で手伝ってくれる何らかの人材の派遣が事業化されていることが望まれる。

こうした支援は無料であることが重要である。たとえワンコインでも、母親は「自分が無理をして我慢をしさえすればお金がかからない」のなら、そちらを選んでしまうためだ。まして、外出が困難なのに利用するために事前に登録や面談に出向かなければならない、双子は2人分の料金がかかる等、負担が増えれば益々、利用は遠ざかる。



6. 保健師は多職種連携による支援の軸に

保健師さんには、ぜひ自分の地域にある社会資源の掘り起こしをお願いしたい。訪問し、その家庭のニーズを探り、必要な支援が届けられるよう、日頃から地域で使える資源を掘り起こしておくことは有益である。シルバー人材センター、子育て広場、ヘルパー、保育ボランティア、ファミリーサポート、訪問看護、災害ボランティア、各種基金など、地域で使える支援は案外ある。ニーズを捉え、社会資源のコーディネーターをすることは保健師としての大きな役割である。この多職種連携の軸になれるのは地域支援の軸である保健師であるため、社会資源をしっかり把握しておくことをお願いしたい。

7. 多胎育児者の定期的な交流の場の設定を

今年度から関市では毎月1回、多胎サロンを開催しているが、毎回、登録している全員が参加している。保健師と助産師も参加し、多胎のスタッフもいるので、安心して参加できるようだ。ただでさえ出かけるのも双子連れだと控えてしまいがちなのに、コロナで予約や人数制限があるとさらに出かけにくい。このサロンは人数制限もなく、他のママ達と話して、共感、ストレス発散にもなっているという。保健師や助産師、ぎふ多胎ネットのスタッフなどニーズに合わせて相談もでき、同じ立場の子育て仲間とも話ができる。「いつもの仲間」と話ができる貴重な場となっている。多胎育児は同じ年齢の子どもが2人いるという特殊な状況の子育てである。仲間と悩みを分かち合い、「自分だけじゃない」と共感したり、少し先輩の話を聞いて見通しを立てたりすることが大切である。

今回の調査でも、こうした交流の場の開催を望む声は多かった。

ぜひ、各地域で交流の場の開催を望む。

また、その際にはぎふ多胎ネットスタッフだけでなく、保健師や助産師も参加し、地域包括支援のメンバーとして情報共有と支援プラン立案の場として活用することが望まれる。

8. 利用しやすい一時預かりを

今回の調査では、子どもが動くようになった1～2歳の多胎育児も負担が大きいことが明らかになった。体力的な負担、イヤイヤ期が2人という精神的な負担、個性が出てきた2人のしつけ等の負担は、計り知れない。レスパイトし、精神的にリセットする時間は大切である。また、時には保育士という専門職に相談したいことも出てくるだろう。

多胎家庭が一時預かりを利用しやすい制度があると、この負担感は軽減される。

例えば宮城県仙台市では、多胎家庭は無料で保育園の一時預かりが利用できるという制度があり、これが1～2歳の多胎児を持った家庭に有効に利用されている。多胎家庭のレスパイトだけでなく、送迎時に保育士に何気なく相談できたり、保育士の方からアドバイスができたりする場ともなっている。

岐阜県でも、ぜひ、こうした制度の整備が望まれる。

9. 産前産後の上の子の預かり期間の延長を

多胎妊婦のお腹は30週ぐらいで単胎の臨月と同じぐらいになる。外出は負担が大きく、また、この時期に無理をすると早産の危険も伴う。今回の調査でも30週ぐらいから上の子を預かってほしいという声が複数あった。

産後も単胎に比べて母体の回復が遅く、ほとんど眠れない過酷な育児を担っている。

また、出産した双子が低体重児であった場合、産後しばらくはNICUに入院する。本当に大変になり、上の子を預かって欲しいのは双子が退院してからである。その時期には産後の預かり期間が切れてしまい上の子を預かってもらえないので、慣れない双子育児をスタートしながら上の子の世話もしているケースもある。こうした家庭からは、以前から産後の上の子の預かり期間を延長してもらえないかという声が届いていた。

肉親の手助けが得られる家庭ばかりではない。それぞれの家庭のニーズに合わせて預かり期間の前倒しや延長が行えるような柔軟な制度が望まれる。

10. 父親への支援を

今回の調査では、父親も育児不安を抱えていること、体調不良の人が多いたことが明らかになった。各市町村で父親への支援を充実させる工夫が望まれる。

現在、父親への情報提供としては「多胎プレパパママ教室」があるため、全妊婦家族がこれに参加してくれるよう、助産師や保健師から呼びかけをさらに強化していただきたい。この教室は先輩パパから多胎育児の実際と父親としての役割や心構えが聞ける貴重な機会となっている。その貴重さを伝え、参加を促していただきたい。



おわりに

この冊子では調査の結果と考察をもとに、いくつかの政策提言を述べています。

行政関係の方に多胎家庭支援政策立案の参考にしていただければと思います。

でも、誤解がないように付け加えるなら、「多胎家庭だけを特別扱いしてほしい」と言っているわけではありません。多胎家庭の課題は数年後に一般の家庭でも起こってきます。多胎家庭の支援はユニバーサルデザインの支援になり得るのです。

実際、多胎支援で始まった地域包括支援メンバーの連携は「他の支援にも活かせる」と助産師さんや保健師さんから聞いたことがあります。多胎家庭に優しい社会は全ての人に優しい社会になるのです。

ですから、どうか多胎家庭支援から始めてみてほしいのです。それが、全ての人に優しい社会作りにつながっていきます。

最後に、岐阜県のある保健師さんの言葉をご紹介します。素晴らしい支援をされたこの保健師さんに、どうしてこんな支援ができたのかを聞いた時、彼女はこう答えました。

「何も特別なことはしていません。嵐の中を実際に歩いて行くのは、このご家族で、私はただ助けることしかできないんです。本当に大変な毎日をやっているのはお母さんで、それはすごいことだなと思う。少しでも手助けができればと思っているだけです。誰でも嵐の中を歩いている人を見たら傘を貸すでしょう。疲れて歩けなくなって休みたそうな時には雨宿りができる軒先を貸すでしょう。私がしたのは、ただそれだけのことです。保健師として当たり前の仕事をしただけです。」

私たちは日々の支援の中で、素晴らしい行政マン、助産師さん、保健師さん、保育士さんなどに会ってきました。岐阜県が「多胎家庭の理想郷」「多胎支援先進県」と呼んでいただけるようになったのは、こうした方々と応援してくださる皆さん、直接支援にあたってくださっているピアサポーターの皆さんのおかげだと思っています。

皆さん、これからも一緒に素晴らしい岐阜県を作っていきましょう！

たくさんのご感謝を込めて。

2022年春

NPO 法人ぎふ多胎ネット 理事長 糸井川誠子

《研究協力者》

服部律子 教授（岐阜県立看護大学 育成期看護学領域）

大学卒業後、助産師看護師として働き、その後看護教育の道に進み、看護師保健師および助産師教育に携わっている。2000年より岐阜県立看護大学で勤務。1995年より京都で多胎サークルを立ち上げ8年間サークルを主催。2004年より岐阜県でのサークルのネットワークの立ち上げに関わり、その後のぎふ多胎ネットに繋がる。現在、日本多胎支援協会理事、ぎふ多胎ネット顧問。



名和文香 准教授（岐阜県立看護大学 育成期看護学領域）

約20年間、母性看護や助産教育に携わる。3年前より、多胎プレパママ教室の講師を担当。



コロナ禍の多胎家庭実態調査報告書

令和4年1月発行

特定非営利活動法人 ぎふ多胎ネット

〒507-0814
岐阜県多治見市市之倉町 13-83-536
TEL/FAX : 0572-24-2322
e-mail : gifu.tatainet@gmail.com
HP : <https://www.gifutatainet.com/>

本書を許可なくして複写・複製することを禁じます。



コロナ禍の
多胎家庭
実態調査報告書